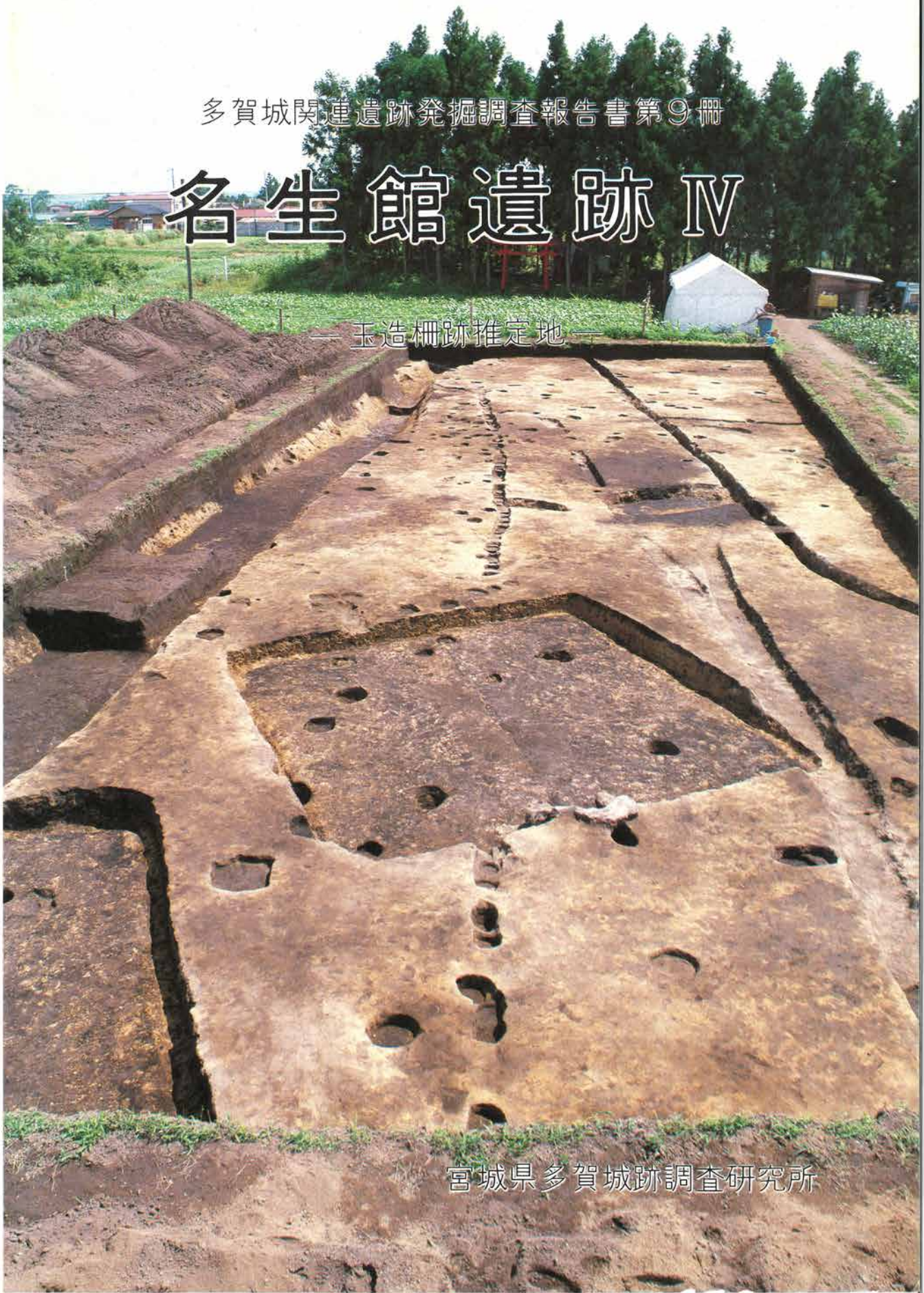
多賀城関連遺跡発掘調査報告書第9冊

名生館遺跡Ⅳ

―玉造柵跡推定地―



宮城県多賀城跡調査研究所

序　　文

昭和58年度の多賀城関連遺跡の調査は、昭和57年度多賀城跡調査研究指導委員会で承認された修正案にもとづく第２次５か年計画の最終年次にあたり、昨年につづき、名生館遺跡の小館地区を対象に第４次発掘調査を実施した。

昭和57年度の第３次調査は、小館地区西半部を対象とした調査で、７世紀末～８世紀にかけての掘立柱建物群や竪穴住居跡群が発見されたが、これらの遺構がさらに調査区の西に拡がることから、本年度はこの地区での官衙の広がりとその変遷や構成の解明を目的として、昨年度調査地区の西隣接地において発掘調査を実施した。その結果、７世紀末～８世紀にかけての多数の掘立柱建物跡、門跡、材木列による塀跡、柱列跡、かわらけの窯跡などの遺構を検出し、この地区の官衙の構成と変遷をより詳細に把握した。また、古代の官衙遺構は、さらに西方に拡がることも明らかになり、小館地区の官衙はかなり広範囲に分布していたとみられ、名生館遺跡全体のなかでの官衙の分布や変遷を解明するうえで大きな成果をあげることができたといえる。このように小館地区をはじめ、第１・２次調査で対象とした城内地区では官衙の構成内容や変遷を具体的に解明できたが、一方では遺跡全体の範囲の確定など、幾多の問題もかかえている。しかし、今後これまでの調査成果を踏まえ、８世紀初頭以前の律令地方官衙の北端といえる本遺跡の指定保存の実現に向かって、鋭意努力する所存である。

本年度の調査にあたり、多くの御指導を賜わった多賀城跡調査研究指導委員会の諸先生をはじめ、文化庁、古川市教育委員会、調査地を快く提供された地主の佐々木繁、渡辺伝治、笠原孝の諸氏、さらには自宅を調査本部として提供された笠原文夫氏に厚く感謝申し上げる。なお、炎暑のさなか、長期間にわたって発掘調査をすすめられた調査員ならびに地元の調査参加者各位に対し心から謝意を表するものである。

昭和59年３月

宮城県多賀城跡調査研究所
所　長　佐々木　光　雄

目　　次

序　　文
Ⅰ．調　査　要　項 …… 1
Ⅱ．遺 跡 の 概 要 …… 2
Ⅲ．第１次・第２次・第３次調査の成果 …… 6
Ⅳ．調　査　経　過 …… 9
Ⅴ．発見された遺構と遺物 …… 13
(1)　掘立柱建物跡 …… 14
(2)　塀跡・柱列跡 …… 27
(3)　竪穴住居跡 …… 28
(4)　土　　坑 …… 36
(5)　　溝 …… 37
(6)　窯　　跡 …… 39
(7)　第１・２層出土の遺物 …… 40
Ⅵ．考　　察 …… 42
１．遺構期の設定 …… 42
２．第３次調査の成果との比較検討 …… 47
３．ま　と　め …… 51
〔付章〕多賀城関連遺跡調査第２次５か年計画の成果 …… 53

例　　言

１．本遺跡の地区割りは城内地区にある三角点を発掘基準原点(0.0) とする直角座標で設定したものである。発掘基準線の北は第Ｘ系座標の北と一致する。本書で用いた方位はすべてこの発掘基準線をもとに計測したものである。

２．本書の作成にあたっては当研究所の佐々木光雄、進藤秋輝、白鳥良一、高野芳宏、古川雅清、後藤秀一、佐藤則之、佐藤和彦、千葉孝弥が協議・検討を行い、執筆・編集には主として後藤秀一があたった。またこれらの作業を鎌田あさ子、清水正子、峰岸あや子、伊藤和子、平山三津子、和田容子、岡田富子が援けた。

Ⅰ．調　査　要　項

1．遺　跡　名　　名生館遺跡

2．所　在　地　　宮城県古川市大崎字名生館、城内、名生小館、名生北館、弥栄

3．調査主体　　宮城県教育委員会（教育長　三浦　徹）

4．調査共催　　古川市教育委員会（教育長　千田清志）

5．調査期間　　昭和58年７月４日～８月13日

6．調査顧問　　多賀城跡調査研究指導委員会委員長・東北大学名誉教授　伊東信雄

7．調査担当者　　宮城県多賀城跡調査研究所長　佐々木光雄

8．調　査　員　　宮城県多賀城跡調査研究所：進藤秋輝、白鳥良一、高野芳宏、古川雅清、後藤秀一、佐藤則之、佐藤和彦、千葉孝弥

東北歴史資料館：小井川和夫、岡村道雄、伊藤　信、千葉景一、佐々木常人、村山斌夫、吉沢幹夫

築館女子高等学校：金野　正、古川工業高等学校：三宅宗議

古川市教育委員会社会教育課：伊藤　隆、石川芳男、千葉　功、相沢広務、吉田功男、中村広志

9．調査参加者　　万城目喜一、二郷　等、鎌田あさ子、清水正子、峰岸あや子、平山三津子、和田容子、伊藤和子、岡田富子、窪田須美江、桜田逸子、高橋千登勢、大貫由美子、福原志美子、伊藤康子、笠原良夫、大場松治、笠原良助、高城春夫、佐々木八弥、大場正志、門脇幸一郎、佐々木善右ェ門、佐々木富男、加藤利男、中村鉄夫、佐々木繁重、都築庄助、笠原ましゑ、菅原たよ、大場とよ子、笠原トシコ、鹿野田洋子、佐々木はつえ、佐々木もとよ、加藤みき子、鹿野千恵子、阿辺トシ子、笠原すみ子

10．調査協力者　　地主：佐々木繁、笠原　孝、渡辺伝治

本部提供：笠原文夫

II. 遺跡の概要

名生館遺跡は古川市大崎に所在する。遺跡は多賀城跡の北約30kmに位置し、北の江合川と南の鳴瀬川の両河川の流域に広がる箆岳、玉造、大松沢の各丘陵に囲まれた大崎平野の北西端にあたる。また、江合川の南岸には標高約40m、沖積地との比高約10mの河岸段丘が北西から南東に延びており、遺跡はこの段丘の東南端付近に立地している(第1図)。

本遺跡は、北と東は段丘崖によって画され、南は小館地区の南側に東から入り込む小さな沢によって限られている。一方、西側は段丘上の平坦面が続き、遺跡がどこまで延びるのかは地形的には判然としない。こういった状況から、本遺跡の範囲は南北約1,000 m、東西は遺物の散布状況からみて少なくとも500 mほどであると思われる。遺跡地は現在大部分が畑地として利用されており、一部は水田や宅地となっている(第2図)。

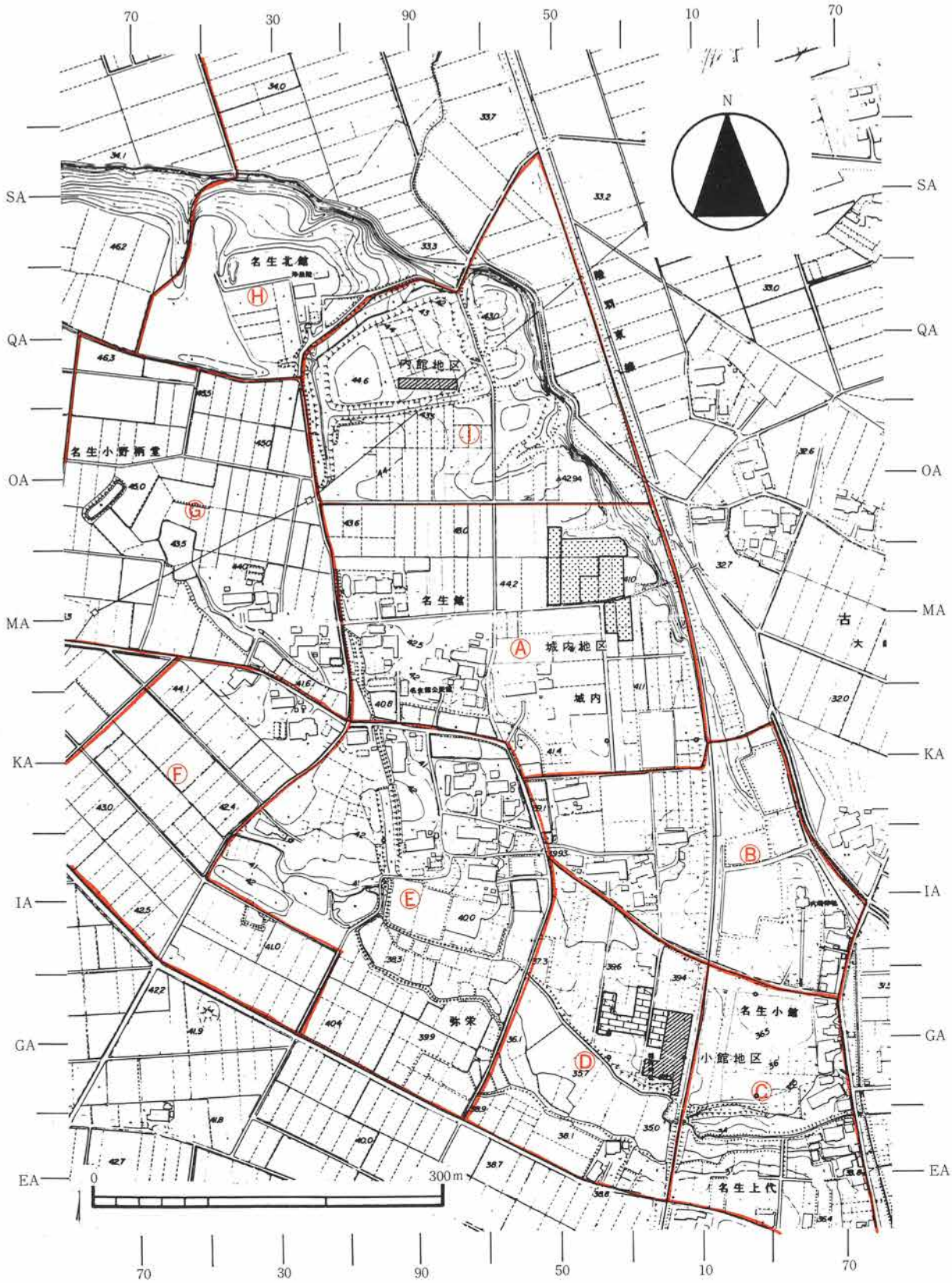
この地区は現在古川市に属しているが、「和名類聚抄」の玉造郡俯見郷にあたるとみられる「伏見」が本遺跡の南約1kmにあることから、古代にはこの地区が玉造郡に属していたことはほぼ間違いがないとされている。

遺跡内には古代の土器や瓦が散布しているのをはじめ、中世の土塁や空堀が遺存している。このうち、古代の瓦の散布は城内地区と小館地区の2か所に集中している。両地点から出土する瓦は文様や製作技法に違いがみられ、城内地区の瓦が山田寺系単弁蓮花文軒丸瓦、ロクロ挽き重弧文軒平瓦であるのに対し、小館地区の瓦は多賀城創建期の重弁蓮花文軒丸瓦である。また、本遺跡は中世に奥州探題大崎氏の居城である名生城が築かれた場所でもあり、土塁や空堀などが残る他、「名生館」「城内」「小館」「北館」「内館」などの地名に当時の名残をとどめている。なお、内館地区からは多量の炭化米が採集されており、倉庫等の存在が予想された。

本遺跡は古くから研究者に注目されてきている。最初に文献に名がみえるのは、寛政10年(1798)に里見藤右ェ門が著した「封内土産考」である。里見は本遺跡出土の布目瓦に注目し、その製作法について鋭い指摘をしたが、瓦は中世大崎氏に関わるものとしている(註1)。次いで明治年間には、本遺跡出土の瓦は古代のものとみられるようになり、原秀四郎は「寺院は瓦葺き」という当時の定説に従って、本遺跡を寺院跡とした(註2)。大正年間には、鈴木省三はこの地区を踏査し、「玉造軍団跡」に擬定した。鈴木はその中心施設を伏見宝龍社(伏見廃寺跡)とし、本遺跡をその付属施設跡とみた(註3)。戦後になると、当時古川工業高校教師であった佐々木忠雄による踏査により、本遺跡の瓦が伏見廃寺跡の瓦と同種のものであることが判明した。昭和45年に佐々木茂楨は伏見廃寺跡の発掘調査を行い、

第１図　名生館遺跡位置図

1．名生館遺跡　2．伏見廃寺跡　3．宮沢遺跡　4．城生遺跡　5．菜切谷廃寺跡
6．一の関遺跡　7．大吉山窯跡群　8．小林杉ノ下窯跡　9．三輪田遺跡　10．日の出山窯跡群



第2図　名生館遺跡の地形図

第1・2次調査地区

第3次調査地区

第4次調査地区

金堂跡と推定される基壇とその周辺から多量の瓦を発見し、この寺跡を俯見公の氏寺と推定し、瓦の年代を平安時代と位置づけた。さらに本遺跡を、同種の瓦が出土することから「玉造塞」に比定した(註４)。その後、進藤秋輝により伏見廃寺跡出土瓦の再検討がなされ、この瓦が様式的・技法的に多賀城の創建瓦より遡るものであることが推定された(註5)。さらに、本遺跡の小館地区からは、土取り工事の際多量の多賀城創建瓦が採集され、本遺跡と奈良時代の玉造柵との関係が一段と注目されてきた。

ところで、本遺跡の周辺には多賀城と密接な関連をもつ城柵官衙遺跡、寺院跡、生産遺跡が数多く存在する。

本遺跡の南約１kmには前述の伏見廃寺跡があり、基壇と多数の瓦などが発見されている(註４)。また、江合川を挟んで対岸の東方約５kmには奈良時代後半から平安時代にかけての城柵官衙遺跡である宮沢遺跡がある。調査の結果、外郭線は時期が異なる築地や土塁であり、規模は東西約1,400 m、南北約850 mで平面形は不整方形をなすことが判明している(註６)。この宮沢遺跡の東南隅に近接して三輪田遺跡があり、ロクロ挽き重弧文や偏行唐草文の軒平瓦が出土している(註７)。一方、本遺跡の南西約５kmには城生遺跡とその付属寺院である菜切谷廃寺跡がある。城生遺跡は一辺約350 mの方形であり、周囲は築地によって区画されている(註８)。また菜切谷廃寺跡では金堂とみられる東西12.7m、南北10.8mの乱石積基壇と多量の多賀城創建期の瓦が発見されている(註９)。さらに、本遺跡の南約９kmには、規模・基壇化粧等で菜切谷廃寺金堂と酷似する基壇をはじめ、多数の掘立柱建物跡が検出された色麻町一の関遺跡がある(註10)。

また、この地域の丘陵には多賀城創建期の瓦窯が集中して営まれている。本遺跡の東約２km、江合川の対岸には大吉山窯跡群があり、南約10kmには日の出山窯跡群がある(註11)。

註１．里見藤右ェ門「封内土産考」(『仙台叢書』第３巻　復刻版　1981)

註２．原秀四郎「玉造塞址につきて」『史学雑誌』第19巻18号　1903

註３．鈴木省三「玉造軍団及名生城」『宮城県史跡名勝天然紀念物調査報告書第二輯』1924

註４．佐々木茂楨「宮城県古川市伏見廃寺跡」『考古学雑誌』第56巻３号　1971

註５．進藤秋輝「東北地方の平瓦桶型作り技法について」『東北考古学の諸問題』1976

註６．宮城県教育委員会「宮沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』1980

註７．古川市教育委員会『三輪田遺跡』　古川市文化財調査報告書第４集　1980

註８．中新田町教育委員会『城生遺跡』　中新田町文化財調査報告書第１・２・４～６集　1978～1982

註９．伊東信雄『菜切谷廃寺跡』　宮城県文化財調査報告書第２集　1956

註10．宮城県教育委員会「一の関遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報(昭和51年度分)』1977

註11．宮城県教育委員会『日の出山窯跡群』宮城県文化財調査報告書第22集　1970

Ⅲ．第１次・第２次・第３次調査の成果

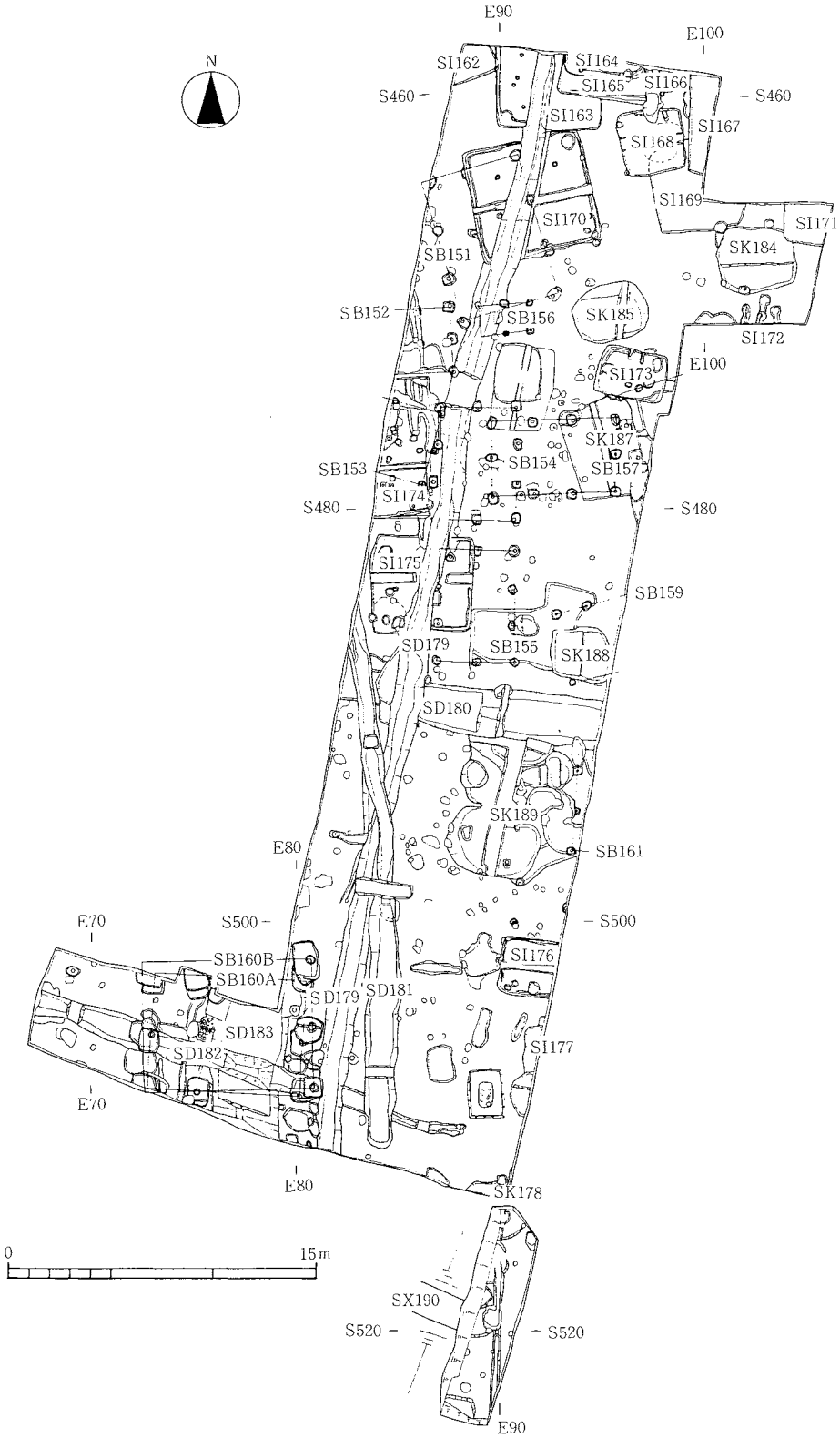
当研究所では名生館遺跡の調査を本年度を含めてこれまで４年継続して実施してきている。遺跡内の城内地区では多賀城創建瓦より古い山田寺系単弁蓮花文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦が、また、小館地区では多賀城創建瓦と同種の瓦の集中的な散布がみられることより、これらの地区には官衙中枢部の存在が想定されていた。また内館地区では炭化米の集中的な散布がみられることより、古代の倉庫の存在が想定されていた。そのため、第１・２次調査は、城内地区を対象に多賀城より古い官衙中枢部の検出を目的として、また第３次調査は、小館地区を対象に多賀城創建期とほぼ同時期の官衙中枢部の検出と、内館地区で古代の倉庫跡の検出をそれぞれ目的として実施した。

〔第１・２次調査：城内地区〕

城内地区では掘立柱建物跡22、一本柱列による塀跡４、竪穴住居跡46のほか多数の溝・土坑を検出している。そしてこれらの各遺構は、重複状況、遺構の方向、柱穴やその埋土の特徴、出土遺物からＡ・Ｂ・C_1・C_2・Ｄの５時期の遺構期に大別される。年代はＡ期が７世紀末頃、Ｂ期が７世紀末頃～８世紀初頭頃、C_1期が８世紀後半頃、C_2期が８世紀後半～９世紀と考えられる。Ａ期の遺構には建物跡７、土坑１があり、建物跡の方向は発掘基準線に対し北で西に偏するものとほぼ一致するものがある。Ｂ期は東西約52.5ｍ、南北約60.6ｍの範囲を一本柱列の塀で区画し、北辺に接する東西７間南北５間の瓦葺き四面廂付き建物跡を正殿とし、西に桁行の長い２棟の南北棟を柱筋を揃えて南北に配し、東に東西３間南北２間の東西棟を１棟配する官衙中枢部の存在した時期である。C_1期の遺構には掘立柱建物跡２、溝１があり、年代は８世紀後半頃と推定される。C_2期の遺構には掘立柱建物跡９、竪穴住居跡12、溝４がある。また竪穴住居跡より「玉厨」の墨書土器が出土している。Ｄ期の遺構には大溝２があり、中世大崎氏の名生城にかかわるものと考えられる。以上の成果より、名生館遺跡は８世紀初頭以前より９世紀にわたる当地方の中心的な城柵官衙遺跡とみられ、城内地区にはＢ期にその中枢部が存在していたことが判明した。

〔第３次調査：小館地区・内館地区〕

小館地区では、掘立柱建物跡11、竪穴住居跡16、土坑６、溝５、土塁１を検出している。これらの各遺構は重複状況、遺構の方向、柱穴や埋土の特徴、出土遺物などからＡ・Ｂ・C_1・C_2・Ｄの５時期の遺構期に大別され、各遺構期の年代はＡ・Ｂ期が７世紀末頃～８世紀初頭頃、C_1期が８世紀前半頃、C_2期が８世紀後半頃、Ｄ期が中世と推定される。各遺構期の概要を示せば以下のようになる。



第３図　第３次調査検出遺構全体図

A期の遺構には掘立柱建物跡4（ＳＢ151・153・158・159）、土坑３（ＳＫ178・186・187）がある。建物跡はいずれも小規模でその配置に計画性は認められない。建物跡の方向は発掘基準線に対して北で西偏するものと東偏するものがある。これらは本来的には時期差をもつものと考えられるが、直接重複していないためＢ期より古いということで一括してある。埋土は黒褐色土や暗褐色土を主体とし一手に埋められている。

Ｂ期の遺構には掘立柱建物跡６（ＳＢ152・154～157・161）がある。建物跡の方向は発掘基準線にほぼ一致する。建物跡はいずれも小規模である。ＳＢ154・155は柱筋を揃えて配置されているが、他の建物跡の配置関係には明瞭な計画性は認められない。ＳＢ154・157は重複しているため本来的には遺構期はさらに細分されると考えられるが、新旧関係を捉えられないためＢ期として一括しておく。柱穴は形状が方形・不整方形・不整円形と様々であるが、規模は0.3～0.6ｍほどである。埋土は地山ブロックをふくむ黒色土・暗褐色土で２～３層に突き固められている。

C_1期の遺構には竪穴住居跡16（ＳＩ162～177）、土坑３（ＳＫ184・185・188）がある。竪穴住居跡は方向が発掘基準線に対して北で西偏するもの、ほぼ一致するもの、東偏するものの３群にグルーピングできる。

C_2期の遺構には掘立柱建物跡１（ＳＢ160Ａ・Ｂ）、土坑１（ＳＫ189）がある。建物跡の方向は発掘基準線に対してほぼ一致する。柱穴は形状が長方形を基調とし、規模が1.0～1.7ｍと大きいことが特徴である。

Ｄ期の遺構には中世大崎氏の居城である名生城に関連するとみられる土塁（ＳＸ190）と溝５（ＳＤ179～183）がある。

以上の成果より小館地区西半部は７世紀末頃～８世紀後半頃にかけて官衙の一部として機能しており、各期で遺構の構成が変化していることより本地区の使われ方も変化していると推測されている。また遺構がさらに西方へ広がる見通しを得ている。そして第１・２次調査の成果をあわせ考えれば、名生館遺跡は少なくとも７世紀末頃～８世紀後半頃にかけては、城内地区から小館地区にかけて広がる大規模な城柵官衙遺跡であると理解される。

一方、内館地区は、多量の炭化米の散布状況より古代の倉庫跡の存在が想定されていた地区である。調査の結果この炭化米は古代のものではなく中世以降のものであることが判明した。遺構としては、古代の竪穴住居跡１、溝１、古代末ないし中世の柱列１・溝４、中世大崎氏の名生城に関連する溝４がある。しかし、小範囲の調査のため、本地区の性格の解明には今後さらに調査をおこなう必要がある。

Ⅳ. 調　査　経　過

第４次調査は、昨年度実施した第３次調査と同様に、小館地区西半部を対象として実施したものである。既述したように第３次調査の目的は、本地区東半部の土取工事の際に出土した瓦より存在が想定された官衙中枢部の検出であった。しかし調査の結果、存在が想定された官衙中枢部は、調査区内に存在しないことが確認され、それは本地区西半部まで広がらず、既に削平された東半部に存在したと推定された。

ところで、第３次調査では７世紀末頃～８世紀後半頃と推定される建物跡・竪穴住居跡などや、中世大崎氏の名生城に関連するとみられる土塁・溝を検出している。そしてこれらの各遺構は、Ａ・Ｂ・C_1・C_2・Ｄ期の５遺構期に区分され、本地区が７世紀末頃～８世紀後半頃にわたり継続的に官衙の一部として機能しており、Ａ期→Ｂ期→C_1期→C_2期と変遷し、その性格も変化している見通しを得ている。また、これら各遺構期を構成する官衙遺構はさらに西方へ広がることも判明した。そこで今回の第４次調査は、これら古代の官衙遺構の西方への広がりを捉え、本地区における官衙の構成と変遷をより明確に把握することを目的として実施したものである。

調査は７月４日に開始した。午前中に発掘器材を搬入し、ただちに測量基準点をもとに幅約３ｍの農道の東西２地点に調査区を設定した。東地区は、東辺を第３次調査の調査区の西辺に一致するように設定しており、南北36ｍ、東西約14ｍである。西地区は南北30ｍ、東西30ｍの逆Ｌ字形の調査区で、東西幅約９ｍ、南北幅６ｍである。翌５日は雨のため作業を中止したが、６日に鍬入式をおこない、その後ただちに東地区から表土剝ぎにとりかかった。表土剝ぎは、東地区が７月７日に終了し、西地区が７月12日に終了した。その結果、調査区内のほぼ全域にわたって黒褐色火山灰層である古代の旧表土（第３層）がみられ、第３次調査でみられた第２層は東地区の限られた部分にしか存在しておらず、その上面で遺構は認められなかった。

東地区では、７月８日より西地区の表土剝ぎと併行して、第３層上面での遺構検出を開始した。第３層上面では、調査区を南北に縦断するＳＡ232塀跡、北半部でＳＩ233･162竪穴住居跡、南半部でＳＢ215建物跡、西よりでＳＤ243溝などを検出した。また、調査区の東辺に接して北へ続く中世の溝ＳＤ183や、これより新しいＳＤ245～248の小さな溝も検出しており、これらの各遺構は新旧関係を確認した後、一部掘り下げた（７月15日）。さらに遺構の検出に努めたところ、新たに調査区北西部でＳＢ212建物跡、北東部でＳＢ211建物跡、南半部でＳＢ214･216･217建物跡を検出した（７月19日）。検出した各遺構の精査を進め

た結果、ＳＡ232は残存状況はあまりよくないが、材木を密接して立て並べた塀跡であり、調査区中央部付近に四脚門（ＳＢ213）が付設されていることが明らかになった。またＳＩ233・162ではともに在地の栗囲式の土師器といわゆる関東系の土師器が共伴する事実も判明した。さらにＳＤ183は南端部でＳＥ254・255と重複しておりいずれよりも古いが、他に重複する古代の建物跡・竪穴住居跡のいずれよりも新しいことが再確認された（７月23日）。７月25日に写真撮影をおこない、翌26日に遺方を設定し平面図の作成にとりかかった。

一方西地区では、東地区の作業と併行しながら東半部より第３層上面で遺構検出を開始した（７月12日）。第３層上面では、東半部でＳＢ219建物跡、ＳＩ235～239竪穴住居跡、ＳＫ256土坑などが複雑に重複していることを確認した。また中央部ではＳＩ240竪穴住居跡、ＳＫ257土坑など、西半部ではＳＩ242竪穴住居跡、ＳＫ260土坑などを検出したほかに、ＳＢ229建物跡の東西両側柱列を３間検出した。そのため調査区の西端部を南北に拡張し建物跡の全体の規模の把握を試みた結果、ＳＢ229は南北５間、東西３間の南北棟建物跡であることを捉えた。また拡張区ではＳＢ230建物跡、ＳＡ231柱列、ＳＩ241竪穴住居跡、ＳＸ273土器焼成遺構も検出している。さらに遺構の検出に努めたところ、ＳＢ221～228建物跡、ＳＫ261土坂などを検出した（７月27日）。

これらの検出した遺構の精査を進めた結果、ＳＩ236・237竪穴住居跡と重複しこれらより新しいＳＢ218建物跡、ＳＩ238竪穴住居跡と重複しこれより古いＳＢ220建物跡をさらに検出した。またＳＩ240を除く他の竪穴住居跡では、東地区のＳＩ233・162竪穴住居跡と同様に在地の栗囲式の土師器といわゆる関東系の土師器が共伴している状況がみられた。建物跡のなかでＳＢ229・230は他のものと比較して平面規模が大きく、柱穴も形状が整い大きく特徴的である。

８月２日に遺方を設定し平面図の作成に入り、順次終了しだい写真撮影をおこなった。８月８日より東西両地区で、断ち割りや断面図の作成などの補足調査を開始し、すべての作業は８月13日に終了した。この間、８月４日には調査成果を報道機関に対して、また８月６日には一般を対象とした現地説明会を開催して公表した。

なお第４次調査の調査面積は、東地区約500㎡、西地区約520㎡である。

第４図　第３・４次調査検出遺構全体図

Ⅴ．発見された遺構と遺物

調査区の層序は次のようになる。

第１層：畑の耕作土で調査区全体に広がる。部分的には色調によって細分できる。

第２層：第３次調査では調査区の北半部と南端部でみとめられたが、今回の調査では東地区の一部にしか存在しなかった。褐色土・暗褐色土を主体とする層である。第３次調査では古代の遺構を覆い、上面からは中世の遺構が検出されていることを把握している。

第３層：黒褐色火山灰層で、ほぼ調査区全体に分布する。古代の遺構はこの層上面で検出されていることより古代の旧表土とみられる。厚さは平均して約20cmである。

第３層下は肘折パミスであり、調査区全体に分布する。厚さは平均して約10cmである。

本調査で検出した遺構には、掘立柱建物跡19、門跡１、材木列の塀跡１、一本柱列の塀跡１、柱列１、竪穴住居跡10、窯跡１、井戸２のほか土坑・溝などがある。

出土した遺物には土師器、須恵器、かわらけ、中世陶器、青磁、瓦、土製支脚、土錘、砥石、鉄製品のほか弥生・縄文土器、石器などがある。土器類はいずれもほとんどが破片資料であり、これらのなかでは土師器の出土量が圧倒的に多く、次いで須恵器が多い。記載の便宜上、土師器の杯類に限って以下のように分類しておく。杯類では３点ロクロ調整によるものが認められる以外他はすべてロクロ調整によらないものである。そこでロクロ調整によらないものをⅠ類、ロクロ調整のものをⅡ類とする。そしてまず技法上の特徴から分類し、次にそれらの器形上の特徴について記述することにする。

杯類は、内面の調整によりＡ：ヘラミガキ調整され、黒色処理が施されるもの（以下内黒という）と、Ｂ：ナデ調整され、黒色処理が施されないもの（以下非内黒という）とに大別される。Ａ類は在地の土師器であり、外面の調整によりＡ－１：口縁部がナデ調整のもので、黒色処理の施されないもの。Ａ－２：口縁部がヘラミガキ調整のもので、黒色処理の施されないもの。Ａ－３：ヘラミガキ調整で、黒色処理の施されるものに細分される。

Ｂ類は、外面の調整についてみると、口縁部はナデ調整、それ以下の底部までがヘラケズリ調整で、いわゆる関東系の土師器である。

またⅡ類の杯類３点は、いずれも内黒の底部資料であるためⅡＡ類としておく。

以上杯類にはⅠＡ－１、ⅠＡ－２、ⅠＡ－３、ⅠＢ、ⅡＡの各類がみられ、これらを量的にみるとⅠＡ－１類、ⅠＢ類が圧倒的に多く、そのほかはごく少量みられるだけである。次にこれらの器形についてみると以下のような傾向がある。

ⅠＡ－１類で主体を占めるのは、底部と体部の境に屈曲点をもち、口径に対して器高が

相対的に低く、体部は直線的にあるいはやや内湾しながら外傾する。底部は丸底あるいは丸底ぎみの平底である。またＩＡ－１類には、これらに比較して小型で、底部から連続的に内湾しながら口縁部まで立ち上がるものなどもみられる。

ＩＡ－２類、ＩＡ－３類はともに全形を復元できるのが１個体である。ＩＡ－２類は底部と体部の境に屈曲点をもち、口径に対して器高は低く、体部は口縁部まで連続的に内湾しながら立ち上がる。底部は平底である。ＩＡ－３類は、平底で口径に対して器高がやや高く、体部は口縁部まで連続的に内湾しながら立ち上がる。

ＩＢ類は、ＩＡ類と比較して相対的に口径に対して器高が高い。丸底で底部から連続的に内湾しながら立ち上がり、口縁部と体部の境に屈曲点をもつものが主体を占める。口縁部の形態で細分も可能であるがここでは一括して扱った。またＩＢ類には、底部から口縁部まで連続的に内湾しながら立ち上がり、口径に較べ器高の高いものなども少量ではあるが認められる。

ⅡＡ類は平底であること以外特徴を捉えられないが、おそらく口径に対して器高が高く、連続的に内湾しながら立ち上がるものと推定される。

なお出土点数については破片資料も含めた点数で示してある。

次に掘立柱建物跡より順次東地区からその概要を説明する。

(1) 掘立柱建物跡

〈東地区〉

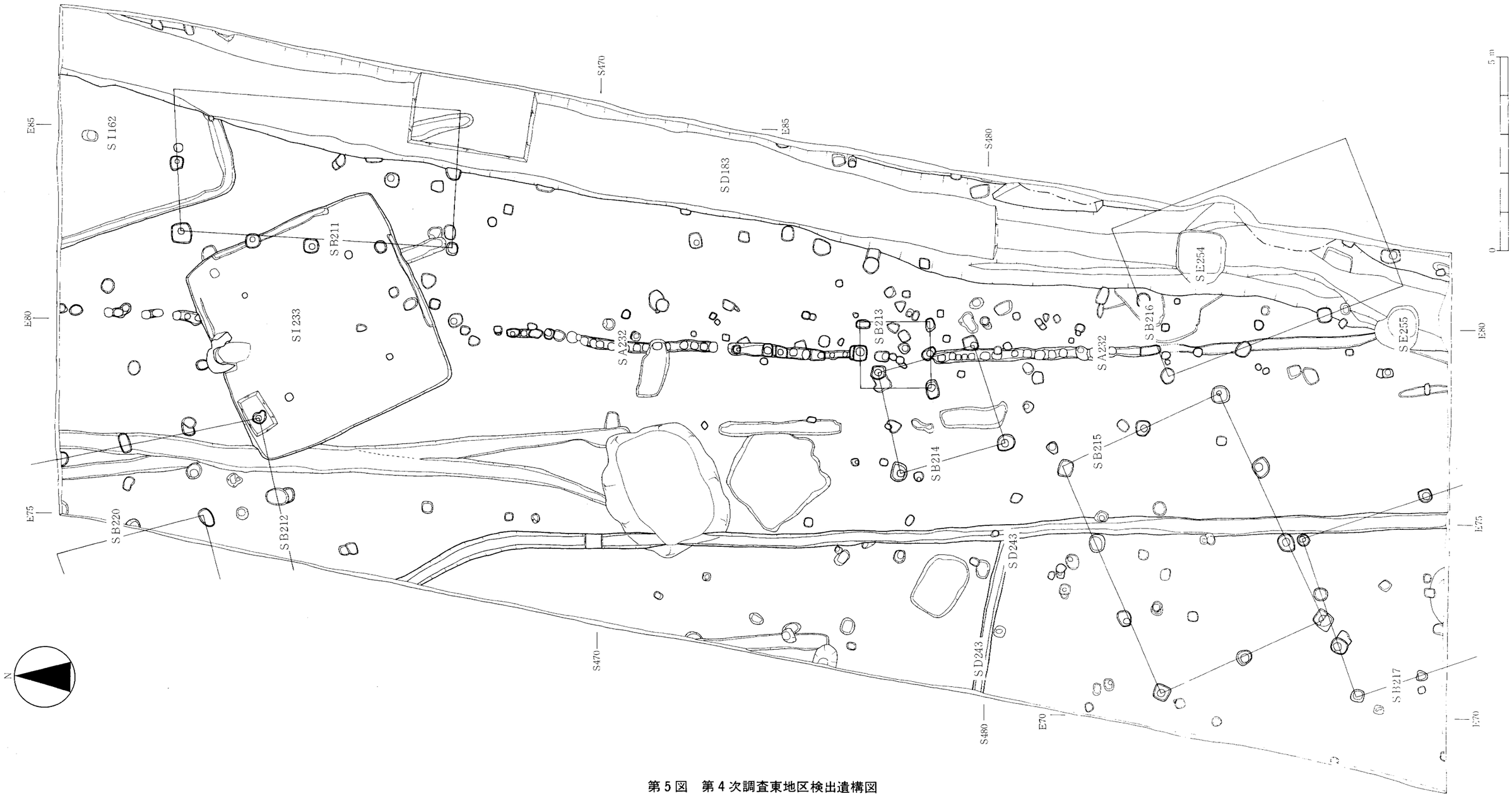
ＳＢ211建物跡（第５図）

東地区北東部の第３層で検出した南北４間、東西２間以上の掘立柱建物跡で、これは第３次調査区内に柱穴が認められないことより梁行２間の南北棟であることが知られる。本建物跡はＳＩ162・233竪穴住居跡、ＳＤ183溝と重複し、ＳＩ162・233より新しく、ＳＤ183より古い。柱穴は西側柱列と南北両妻で７個検出しており、0.3～0.5ｍほどの方形や円形をなす。深さは断ち割りを実施していないため不明である。埋土は地山小ブロックをふくむ黒褐色土を基調とする。柱痕跡は３か所で確認しており、径約15cmである。

柱間は、柱痕跡を確認していない柱穴ではその中央に柱位置を想定すると、桁行が西側柱列で北より1.86・1.57・約1.8・約1.8ｍとなり総長は約7.0ｍである。梁行は北妻で西より1.77ｍ・不明(１間分)、南妻で西より約２ｍ・不明（１間分）となり、総長は不明である。建物跡の方向は、西側柱列で測ると北で約４度東へ偏する。出土した遺物はない。

ＳＢ212建物跡（第５図）

東地区北西隅の第３層で検出した桁行３間以上、梁行２間と推定される南北棟掘立柱建



第５図　第４次調査東地区検出遺構図

物跡である。本建物跡はＳＢ220建物跡、ＳＩ233竪穴住居跡と重複し、ＳＩ233より古いがＳＢ220との新旧関係は不明である。柱穴は東側柱列と南妻で５個検出しており、0.3～0.5ｍの不整円形をなす。深さは断ち割りを実施していないため不明である。埋土は地山小ブロックを含む黒色土、黒褐色土を基調とする。柱痕跡は南東隅の柱穴で検出しており径15cmである。

柱間は柱痕跡を確認していない柱穴ではその中央に柱位置を想定すると桁行が東側柱列で南より約1.9・約1.7・約1.7ｍとなり総長は不明である。梁行は南妻で東より約2.1ｍ・不明（１間分）となる。建物跡の方向は東側柱列で測ると北で約12度西へ偏する。出土した遺物はない。

ＳＢ214建物跡（第５図）

東地区中央部やや南寄りの第３層で検出した東西１間、南北１間の掘立柱建物跡である。ＳＢ213建物跡、ＳＡ232塀跡と重複するが新旧関係は不明である。柱穴は４個すべて検出しており、0.4～0.5ｍの不整方形や円形をなすが、深さは断ち割りを実施していないため不明である。埋土は地山ブロックを多量に含む黒褐色土を基調とする。柱痕跡はすべての柱穴で検出しており、径約20cmである。

柱間は西側柱列で2.72ｍ、南側柱列で2.64ｍ、東側柱列で2.54ｍ、北側柱列で2.63ｍとなる。建物跡の方向は西側柱列で測ると北で約17度西へ偏する。出土した遺物はない。

ＳＢ215建物跡（第５図）

東地区南半部の第３層で全形を検出した桁行３間、梁行２間の東西棟掘立柱建物跡である。ＳＢ217建物跡、ＳＤ243溝と重複し、ＳＤ243より新しいが、ＳＢ217との新旧関係は不明である。柱穴はすべて検出しており、0.4～0.5ｍの不整円形あるいは方形をなし、深さは約0.3ｍである。埋土は地山ブロックを含む黒色土と暗褐色土の互層をなす。柱痕跡は８か所で確認しており、径約20cmである。

柱間は、柱痕跡を確認していない柱穴ではその中央に柱位置を想定すると、桁行が南側柱列で西より2.20・2.07・2.18ｍとなり総長は6.44ｍ、また北側柱列では西より2.01・約2.2・約2.1ｍとなり総長は約6.3ｍである。梁行は西妻で南より2.27・2.33ｍとなり総長4.60ｍ、東妻で南より2.15・約2.24ｍとなり総長約4.4ｍである。建物跡の方向は南側柱列で測ると、東で約25度北へ偏する。遺物は須恵器甕の体部破片が１点柱穴埋土より出土している。

ＳＢ216建物跡（第５図）

東地区南東隅の第３層で検出した南北３間、東西２間の南北棟掘立柱建物跡である。ＳＡ232塀跡、ＳＥ254井戸、ＳＤ183溝と重複し、ＳＥ254、ＳＤ183より古いが、ＳＡ232との

新旧関係は不明である。本調査区内では西側柱列と北妻で4個の柱穴を検出しているが、第3次調査で東側柱列の2個の柱穴を検出している。柱穴は0.4mほどの円形をなし、埋土は地山ブロックを含む黒褐色土を基調とする。深さは断ち割りを実施していないため不明である。いずれの柱穴でも柱痕跡を確認していないが、その中央に柱位置を想定すると、柱間は桁行が西側柱列で北より約2.1・約2.3m・不明(1間分)となり総長は不明である。梁行は北妻で西より約2.0m・不明(1間分)となる。また総長は北妻より1間目の両側柱列の柱穴で測ると約4.4mとなる。建物跡の方向は西側柱列で測ると北で約22度西へ偏する。出土した遺物はない。

ＳＢ217建物跡（第5図）

東地区南端部の第3層で検出した東西3間、南北2間以上の掘立柱建物跡である。ＳＢ215建物跡、ＳＤ243溝と重複するが、新旧関係は不明である。東西両側柱列と北側柱列で6個の柱穴を検出しており、0.3～0.4mほどの不整円形あるいは不整方形をなす。深さは断ち割りを実施していないため不明である。埋土は地山細粒を多量に含む暗褐色土を基調としている。柱痕跡は3か所で確認しており径約15cmである。

柱間は、柱痕跡を確認していない柱穴ではその中央に柱位置を想定すると、北側柱列で東より約1.5・1.4・1.4mとなり総長約4.3mである。また西側柱列では北より約1.7m・不明、東側柱列では北より3.31m（2間分）・不明となる。建物跡の方向は北側柱列で測ると東で約19度北へ偏する。出土した遺物はない。

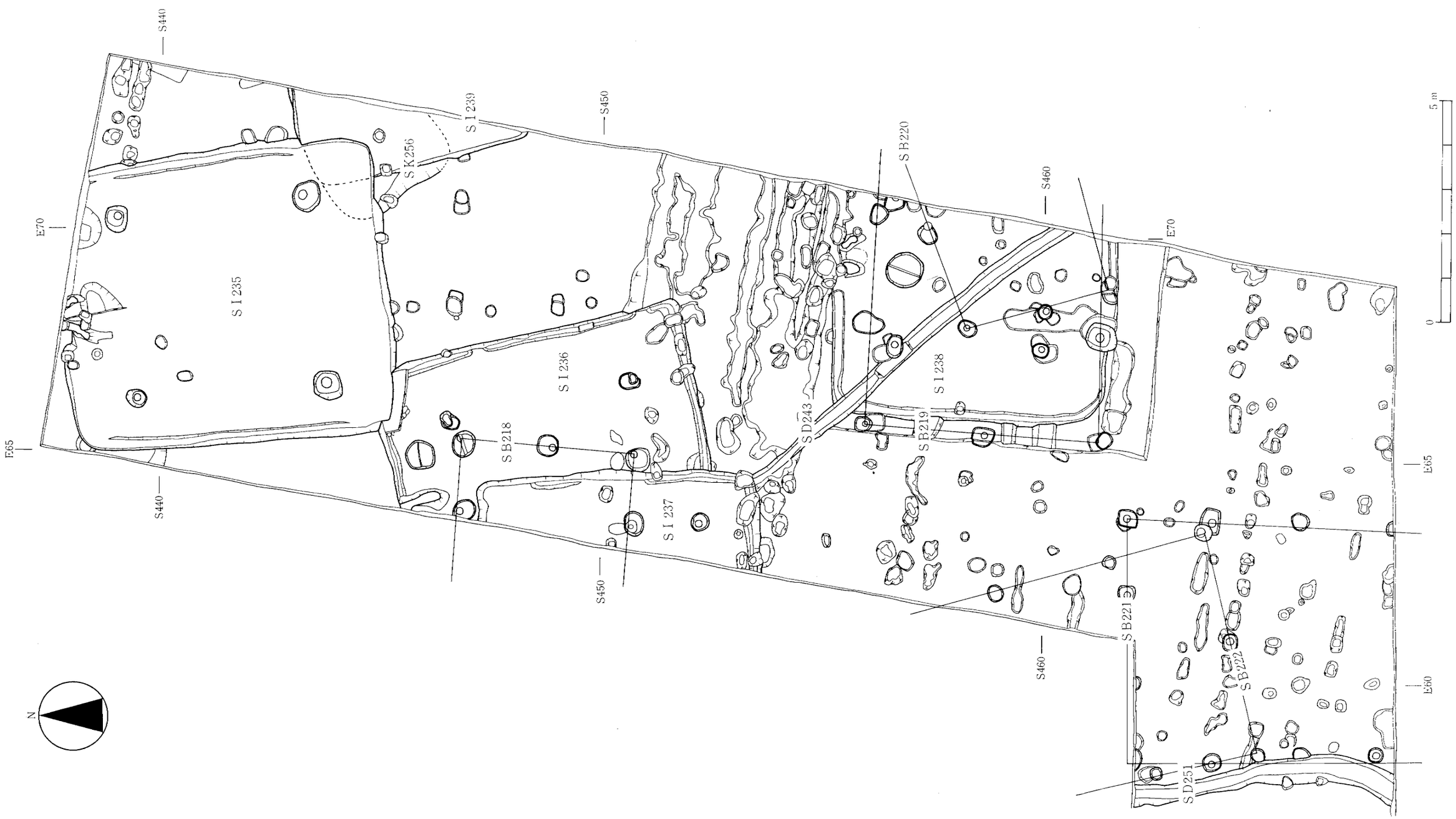
ＳＢ213門跡（第5図）

東地区中央部の第3層で検出した間口1間、梁行2間と考えられる後述するＳＡ232塀跡に付設された門跡である。北西隅の柱穴を検出していないが、他の柱穴の残存状況が悪いことを考慮すれば、削平されたとみることも可能でありここでは四脚門と考えておく。ＳＢ214建物跡と重複するが新旧関係は不明である。柱穴は0.3～0.4mほどの方形あるいは不整方形をなす。深さは約10cmである。埋土は地山ブロックを多量にふくむ黒褐色土を基調とする。柱痕跡は3か所で確認しており径20cmほどである。柱間は、柱痕跡を確認していない柱穴ではその中央に柱位置を想定すると、間口は1.81m、梁行は南妻で東より約0.8・0.88mとなり総長約1.7mである。方向は主柱で測ると北で約1度東へ偏する。出土した遺物はない。

〈西地区〉

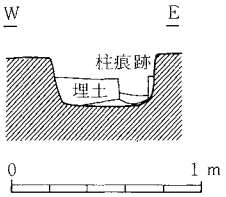
ＳＢ218建物跡（第6・7図）

西地区北東部で検出した東西2間以上、南北2間の掘立柱建物跡である。調査区の関係で東側柱列と南北両側柱列でそれぞれ1間分の柱穴を検出しただけである。ＳＩ236・237



第６図　第４次調査西地区検出遺構図(1)

竪穴住居跡と重複し、いずれよりも新しい。柱穴は東側柱列と南北両側柱列で５個検出しており、いずれも径0.5～0.6ｍの円形をなし深さは0.25ｍである。埋土は地山小ブロックを含む黒褐色土と極暗褐色土の互層をなす(第７図)。柱痕跡は４か所で確認しており径約15cmである。



第７図
ＳＢ218建物跡
北東隅柱穴断面図

柱間は、柱痕跡を確認していない柱穴ではその中央に柱位置を想定すると北側柱列で東より1.64ｍ・不明、南側柱列で東より約1.5ｍ・不明である。また東側柱列で北より2.11・1.83ｍとなり総長3.92ｍとなる。建物跡の方向は東側柱列で測ると北で約５度東へ偏する。出土した遺物はない。

ＳＢ219建物跡（第６図）

西地区東部の第３層で検出した桁行２間以上、梁行２間の掘立柱建物跡で東地区に柱穴がのびないことから、桁行３間の東西棟と考えられる。調査区の関係で西妻と北側柱列で２間分、南側柱列で１間分の柱穴を検出しただけである。ＳＢ220建物跡、ＳＩ238竪穴住居跡、ＳＤ243溝と重複し、いずれよりも新しい。柱穴は６個検出しており、0.3～0.4ｍの方形あるいは径０.７ｍほどの不整円形をなす。深さは断ち割りを実施していないため不明である。埋土は地山ブロックを多量に含む黒色土を基調とする。柱痕跡は３か所で確認しており径15～20cmである。

柱間は、柱痕跡を確認していない柱穴ではその中央に柱位置を想定すると桁行が北側柱列で西より約2.3・約2.5ｍ・不明、南側柱列で西より約2.3ｍ・不明である。梁行は西妻で北より2.70・約2.8ｍとなり総長約5.5ｍである。建物跡の方向は西妻で測ると北で約３度東へ偏する。遺物は柱穴埋土よりロクロ調整によらない土師器甕の体部破片が３点出土している。

ＳＢ220建物跡（第６図）

西地区東端部から東地区北西隅にかけての第３層で検出した桁行３間、梁行２間の東西棟掘立柱建物跡である。ＳＢ219建物跡、ＳＩ238竪穴住居跡、ＳＤ243溝と重複し、ＳＢ219、ＳＩ238より古いが、ＳＤ243との新旧関係は不明である。柱穴は東西両妻と北側柱列で５個検出しており、0.3～0.5ｍほどの円形あるいは楕円形をなす。深さは断ち割りを実施していないため不明である。埋土は地山細粒を少量含む黒色土を基調とする。柱痕跡は２か所で確認しており径約15cmである。

柱間は、柱痕跡を確認していない柱穴ではその中央に柱位置を想定すると、桁行が北側柱列で西より約2.2ｍ・不明(２間分)、総長は南側柱列で約6.4ｍである。梁行は西妻で北より1.86・約1.5ｍとなり総長約3.3ｍである。建物跡の方向は西妻で測ると北で約12度西

へ偏する。出土した遺物はない。

ＳＢ221建物跡（第６図）

西地区東半部の第３層で検出した桁行３間以上、梁行３間の南北棟掘立柱建物跡である。ＳＢ222建物跡、ＳＤ251溝と重複し、ＳＤ251より古いが、ＳＢ222との新旧関係は不明である。北妻と東西両側柱列で９個の柱穴を検出している。柱穴は0.3～0.6ｍほどの方形あるいは円形をなすが、深さは断ち割りを実施していないため不明である。埋土は地山ブロックを多量に含む黒褐色土を基調とする。柱痕跡は４か所で確認しており径約15cmである。

柱間は、柱痕跡を検出していない柱穴ではその中央に柱位置を想定すると、桁行が東側柱列で北より1.93・約2.0・約2.1ｍ・不明、西側柱列で北より不明（１間分）・約2.0ｍ・不明である。梁行は北妻で東より1.75ｍ・不明（２間分）となる。総長は北妻より１間目で測ると5.47ｍである。建物跡の方向は東側柱列で測ると北で約２度東へ偏する。出土した遺物はない。

ＳＢ222建物跡（第６図）

西地区東半部の第３層で検出した桁行２間以上、梁行２間の南北棟掘立柱建物跡である。ＳＢ221建物跡、ＳＤ251溝と重複し、ＳＤ251より古いが、ＳＢ221との新旧関係は不明である。柱穴は南妻と東側柱列で６個検出しており、いずれも0.3～0.4ｍほどの円形をなす。深さは断ち割りを実施していないため不明である。埋土は地山小ブロックを少量含む黒色土を基調とする。柱痕跡は１か所で確認しており径15cmである。

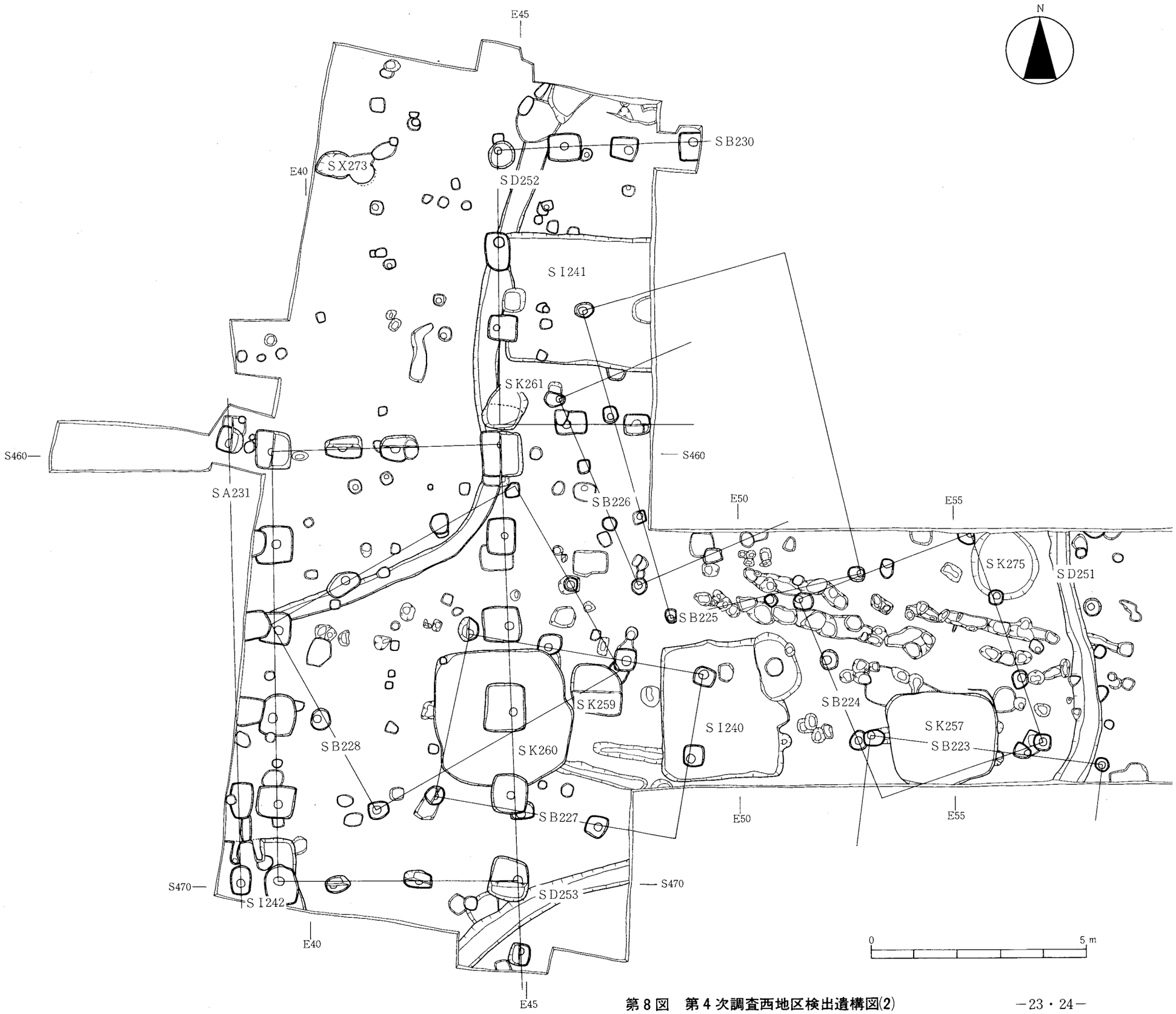
柱間は柱痕跡を確認していない柱穴ではその中央に柱位置を想定すると、桁行が東側柱列で南より約2.3・約2.7ｍ・不明、西側柱列で南より約2.4ｍ・不明である。梁行は南妻で東より約2.6・約2.6ｍとなり総長は約5.2ｍである。建物跡の方向は南妻で測ると東で約14度北へ偏する。出土した遺物はない。

ＳＢ223建物跡（第８図）

西地区中央部の第４層で検出した３間分の柱列より想定した掘立柱建物跡である。ＳＢ224建物跡、ＳＫ257土坑と重複し、ＳＢ224より新しく、ＳＫ257より古い。柱穴は径0.3ｍほどの円形、あるいは0.4～0.5ｍの不整方形をなすが、深さは断ち割りを実施していないため不明である。埋土は地山ブロックを多量に含む黒褐色土を基調とする。柱痕跡は検出した柱穴すべてで確認しており、径約15cmである。建物跡の方向は、東で約８度南へ偏する。出土した遺物はない。

ＳＢ224建物跡（第８図）

西地区中央部の第４層で検出した桁行３間、梁行２間の南北棟掘立柱建物跡である。ＳＢ223・225建物跡、ＳＫ257土坑と重複し、ＳＢ223、ＳＫ257より古いがＳＢ225との新旧関



第 8 図　第 4 次調査西地区検出遺構図(2)

係は不明である。北妻と東西両側柱列で８個の柱穴を検出している。柱穴は径0.3～0.5ｍの円形をなすが、深さは断ち割りを実施していないため不明である。埋土は地山ブロックを多量に含む黒褐色および極暗褐色土である。柱痕跡は検出した柱穴すべてで確認しており、径15～20cmである。

柱間は桁行が東側柱列で北より1.60・1.98・1.60ｍ、西側柱列で北より1.59ｍ・1.97・不明である。梁行は北妻で東より2.04・2.23ｍ、総長4.27ｍとなる。建物跡の方向は北妻で測ると東で約21度北へ偏する。出土した遺物はない。

ＳＢ225建物跡（第８図）

西地区南半部の第４層で検出した桁行３間、梁行２間の南北棟掘立柱建物跡である。ＳＢ224・226・230建物跡、ＳＩ241竪穴住居跡と重複し、ＳＩ241より古いがＳＢ224・226・230との新旧関係は不明である。西側柱列と南妻で６個の柱穴を検出している。柱穴は0.3～0.5ｍほどの円形あるいは不整方形をなすが、深さは断ち割りを実施していないため不明である。埋土は地山ブロックを含む黒色土を基調とする。柱痕跡は検出した柱穴すべてで確認しており、径15～20cmである。

柱間は桁行が西側柱列で北より2.52・2.37・2.48ｍ、総長7.37ｍとなる。梁行は南妻で東より2.20・2.33ｍ、総長4.53ｍとなる。建物跡の方向は西側柱列で測ると北で約16度西へ偏する。出土した遺物はない。

ＳＢ226建物跡（第８図）

西地区西部の第４層で検出した南北３間、東西２間以上の掘立柱建物跡である。ＳＢ225・230建物跡、ＳＩ241竪穴住居跡と重複し、ＳＩ241より古いがＳＢ225・230との新旧関係は不明である。西側柱列と南北両側柱列で６個の柱穴を検出している。柱穴は0.3～0.5ｍの方形あるいは円形をなすが深さは断ち割りを実施していないため不明である。埋土は地山小ブロックをふくむ黒褐色土を基調とする。柱痕跡は２か所で確認しており径約15cmである。

柱間は、柱痕跡を確認していない柱穴では、その中央に柱位置を想定すると、西側柱列で北より約1.6・約1.5・約1.6ｍ、総長約4.7ｍとなる。北側柱列で西より約1.5ｍ・不明、南側柱列で約1.7ｍ・不明となる。建物跡の方向は西側柱列で測ると北で約23度西へ偏する。出土した遺物はない。

ＳＢ227建物跡（第８図）

西地区西部の第４層で検出した桁行３間、梁行２間の東西棟掘立柱建物跡である。ＳＢ228・229建物跡、ＳＩ240竪穴住居跡、ＳＫ260土坑と重複し、ＳＢ228建物跡より新しく、ＳＢ229・ＳＩ240・ＳＫ260より古い。西妻棟通り下の柱穴はＳＫ260土坑により壊されており、また南東隅の柱穴は調査区の関係で未検出である。柱穴は0.4～0.6ｍの方形をなし

深さは約0.3mである。埋土は地山小ブロックをふくむ、黒褐色土と暗褐色土の互層をなす。柱痕跡は検出した柱穴すべてで確認しており、径約20cmである。

柱間は桁行が北側柱列で西より1.87・1.84・1.81m、総長5.53m、南側柱列で西より2.03m・1.82m・不明（1間分）となる。梁行は東妻で北より1.99m・不明（1間分）となり、総長は西妻でみると3.87mとなる。建物跡の方向は北側柱列で測ると東で約10度南へ偏する。遺物は柱穴埋土より、須恵器甕の体部破片4点と土師器杯ＩＡ－1類の口縁部と体部破片各1点、甕の口縁部破片1点が出土している。

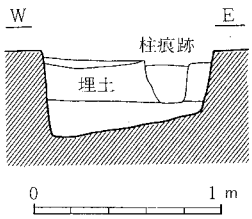
ＳＢ228建物跡（第8図）

西地区西部の第4層で検出した桁行3間、梁行2間の東西棟掘立柱建物跡である。ＳＢ227・229建物跡、ＳＡ231柱列跡、ＳＫ259・260土坑、ＳＤ252溝と重複し、ＳＤ252を除くいずれよりも古いがＳＤ252との新旧関係は捉えられなかった。北側柱列と東西両妻で7個の柱穴を検出している。柱穴は0.4～0.8mほどの方形あるいは不整方形をなすが、深さは断ち割りを実施していないため不明である。埋土は地山大・小ブロックを少量ふくむ黒色土を基調とする。柱痕跡は4か所で確認しており径約20cmである。

柱間は、柱痕跡を確認していない柱穴ではその中央に柱位置を想定すると、桁行が北側柱列で東より約1.9・約2.5m・不明（1間分）となり、総長は東西両妻棟通り下の柱穴でみると6.65mである。梁行は東妻で北より約2.6・約2.3m、総長は約4.9mである。建物跡の方向は東西両妻棟通り下の柱穴の柱痕跡で測ると東で約27度北へ偏する。遺物は柱穴埋土から須恵器の小破片（不明）1点、土師器ではロクロ調整によらない甕の破片5点が出土している。

ＳＢ229建物跡（第8・9図）

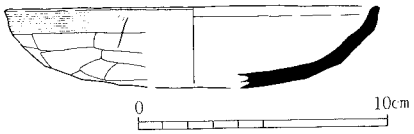
西地区西部の第4層で全形を検出した桁行5間、梁行3間の南北棟掘立柱建物跡である。ＳＢ227・228建物跡、ＳＡ231柱列跡、ＳＫ260土坑、ＳＤ252溝と重複し、ＳＢ228・227、ＳＫ260より新しく、ＳＡ231より古い。また本建物跡北東隅柱穴とＳＢ230建物跡南西隅柱穴は直接重複しないが密接しており、両建物跡は同時には存在し得ないと考えられる。柱穴はすべて検出しており、東西両側柱列で0.7×0.9m～0.9×1.2mほどの方形、南北両妻で0.4×0.6m～0.6×0.9mほどの不整方形をなし、深さは0.3～0.7mである（第9図）。埋土は地山小ブロックを多量にふくむ黒褐色と極暗褐色土の互層をなす。柱痕跡は柱穴すべてで確認しており、径15～25cmである。



第9図　ＳＢ229建物跡東南隅柱穴断面図

柱間は、桁行が東側柱列で北より2.04・2.11・2.01・1.95・

1.98mで総長 10.01 m、両側柱列で北より2.06・2.01・2.03・2.00・1.8mとなり総長9.90mである。梁行は北妻で東より2.45・1.24・1.66mとなり総長5.35m、南妻で東より2.31・1.97・1.27mとなり総長5.55mである。建物跡の方向は東側柱列で測ると約2度西へ偏する。遺物はすべて破片資料であるが比較的多く柱穴埋土より出土している。須恵器は手持ちヘラケズリ調整の杯1点、切り離し不明の杯5点、高台杯2点、蓋と瓶類各1点、甕14点、土師器は杯ⅠA－1類16点、杯ⅠB類8点(第10図)。ロクロ調整によらない甕64点、高杯1点、不明15点があり、他に土製支脚の破片が1点ある。



第10図　ＳＢ229建物跡柱穴出土遺物

ところで、ＳＢ229建物跡南東隅柱穴の南で1個の柱穴を第4層で検出している。柱痕跡を確認しており、それがＳＢ229建物跡の東側柱列の柱筋の南延長線上に完全に位置することから、ＳＢ229建物跡東南隅柱に取りつく一本柱列による塀跡とここでは考えておきたい。

柱穴は約0.5×0.6mの方形をなし、深さは約0.3mである。埋土は地山大・小ブロックをふくむ黒褐色土で互層をなす。柱痕跡は径約15cmである。方向はＳＢ229の東側柱列と同じと考えて北で約2度西へ偏する。出土した遺物はない。

ＳＢ230建物跡（第8図）

西地区北西部の第4層で検出した南北3間、東西3間以上と考えられる掘立柱建物跡である。ＳＢ225・226建物跡、ＳＩ241竪穴住居跡、ＳＫ261土坑、ＳＤ252溝と重複し、ＳＤ252・ＳＩ241より新しく、ＳＫ261より古いが、ＳＢ225・226とは直接切り合い関係はもたない。またＳＢ229建物跡の北東隅柱穴と本建物跡の南西隅柱穴がほとんど接することから、両建物は同時に存在したと考えにくいが、その新旧関係は不明である。西側柱列と南北両側柱列で9個の柱穴を検出している。柱穴は径0.6～0.8mほどの円形あるいは方形をなし、深さは約0.4mである。埋土は地山小ブロックをふくむ黒褐色土と暗褐色土の互層をなす。柱痕跡は8か所で確認しており径15～20cmである。

柱間は西側柱列で北より2.17・2.01m・不明（1間分）となる。総長は西側柱列から1間目の南北両側柱列の柱穴でみると6.50mである。北側柱列で西より1.55・1.51・1.53m・不明となり3間分の長さは4.58m、南側柱列で西より不明(1間分)・1.57m・不明となる。建物跡の方向は北側柱列で測ると東で約2度北へ偏する。遺物は、柱穴埋土より土師器杯ⅠA類の破片1点、ロクロ調整によらない甕の破片5点出土している。

(2)　塀跡、柱列跡

ＳＡ232塀跡（第5図）

東地区のほぼ中央を南北に縦断する溝状の掘り方に丸太材を立て並べた材木列の塀である。第３層で長さ約30ｍ検出したが、残存状況はきわめて悪く、さらに南北方向とも調査区外へ続くと考えられる。また本塀跡は、ほぼ中央部が1.8ｍほど途切れており、ここに前述した四脚門（ＳＢ213）が配置されている。

ＳＢ214・216建物跡、ＳＩ233竪穴住居跡、ＳＥ255井戸と重複し、ＳＩ233より新しくＳＥ255より古いが、ＳＢ214・216との新旧関係は不明である。

溝状の掘り方は幅0.3～0.4ｍほどで、深さは最も良好に残存していたところで0.2ｍほどである。埋土は地山ブロックをふくむ黒褐色土１層である。丸太材の痕跡は径10～20cmで密接して連続している。丸太材は基本的には溝状の掘り方内に直接立て並べられるが、部分的には約1ｍ間隔でさらに方形の掘り方を掘り丸太材を立てていることを確認している。また残有状況は悪いが、材木列の東側0.7～1.0ｍほどに約２.４ｍ間隔でこれと平行して並ぶ径0.2～0.4ｍの小柱穴列を検出している。これは材木列の塀の支柱の可能性がある。塀跡は中央部付近でやや西へ張り出し若干弧状をなすが、その方向は丸太材の痕跡で測ると北で約２度東へ偏する。遺物は丸太材の痕跡の埋まり土より土師器杯ＩＢ類の破片２点、ロクロ調整によらない甕の破片３点が出土している。

ＳＡ231柱列跡（第８図）

西地区西端部の地山面で検出した５間以上の柱列である。本柱列は北へさらに続くと考えられるが、南については不明である。ＳＢ229・ＳＩ242と重複しいずれよりも新しい。柱穴は６個検出しているが、全形を検出したのは南北両端の柱穴だけである。柱穴は0.5×0.6ｍ～0.6×0.9ｍほどの不整方形あるいは方形をなし、深さは約0.4ｍである。埋土は地山大・小ブロックを多量にふくむ黒褐色土の互層をなす。柱痕跡は検出した柱穴の南北両端の柱穴で確認しており、径20～25cmである。

柱間は５間分の長さが10.16ｍであり、これを等間と考えれば、約2.0～2.1ｍほどと考えられる。方向は北で約１度西へ偏する。出土した遺物はない。

(3) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は東地区で2棟、西地区で8棟検出している。このなかでほぼ全形を検出しているＳＩ233･235･236･240と、建物跡と重複するＳＩ238･241についてその概要を説明する。

〈東地区〉

ＳＩ233竪穴住居跡（第５図）

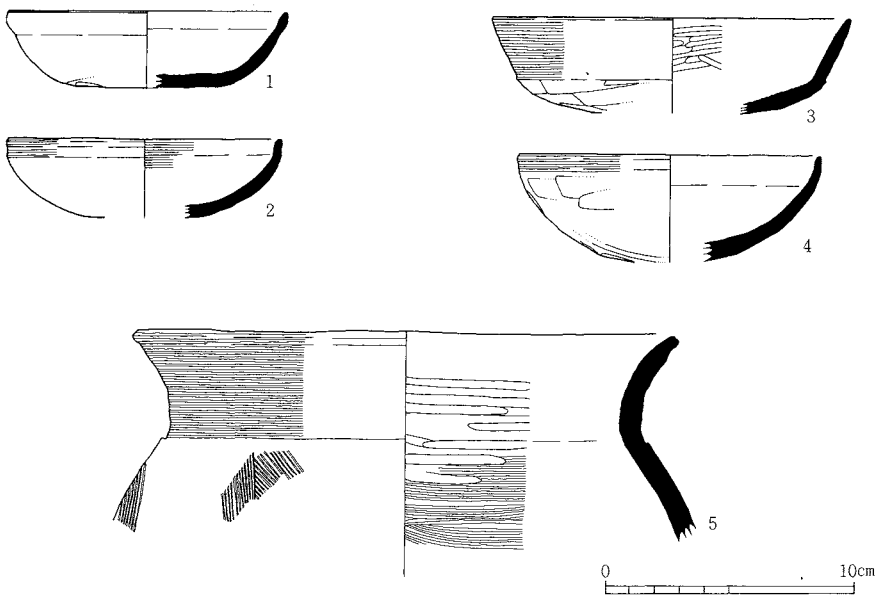
東地区北半部の第３層で全形を検出した竪穴住居跡である。ＳＢ211･212建物跡、ＳＡ232塀跡と重複し、ＳＢ212より新しくＳＢ211、ＳＡ232より古い。残存状況は壁の高さが0.5ｍ

ほどである。平面形はほぼ正方形をなし、規模は各辺とも約5.2mである。方向は西辺で測ると北で約25度西へ偏する。床は全面地山小ブロックをふくむ暗褐色土を突き固めた貼床で、ほぼ水平である。カマドは北辺のほぼ中央に付設されており、貼床上面より灰白色粘土で構築されている。焚口部は内幅0.4～0.5m、奥行き約0.7mで、煙道は短かく急に立ち上がり、直接径20cmほどの煙出し孔に続いている。周溝は貼床上面の北辺東半部と南・西辺中央部で検出している。幅10～20cm、深さ3～5cmで断面形はゆるやかなU字形をなすが、いずれも途切れている。周溝埋土は地山ブロックをふくむ暗褐色土で住居内の埋土とは区別される。

柱穴は住居の対角線上で4個貼床下で検出されており、径0.4～0.5mの円形をなす。柱痕跡はいずれも径15～20cmである。

住居内の埋土は4層認められる。第1層は地山小ブロックをふくむ黒色土で住居の中央部に認められる。第2層は地山小ブロックを多量にふくむ黒色土で、住居中央部では直接床面を覆う。第3層は地山ブロックを少量ふくむ黒色土で南壁ぎわに堆積しており、床を直接覆う。第4層は地山細粒を多くふくむ黒色土でカマドの灰白色粘土粒や焼土粒も混じる。住居の北半部に厚く堆積しており直接床を覆う。

遺物には須恵器、土師器があり、他に土製支脚（図版10－8）が1点出土している（第



1	床　面	須恵器	杯	手持ちヘラケズリ調整	4	埋土2層	土師器	杯	ＩＢ類
2	埋土2層	土師器	杯	ＩＡ－1類	5	床　面	土師器	甕	
3	埋土2層	土師器	杯	ＩＢ類					

第11図　ＳＩ233住居跡出土土器

11図)。

床面からは須恵器では手持ちヘラケズリ調整の杯１点(１)、甕の体部破片が１点、土師器では杯ＩＢ類１点とロクロ調整によらない外面ハケ目調整の甕１点(５)が出土している。埋土３・４層からは須恵器では甕の破片１点、土師器では杯ＩＡ－１類１点、ＩＢ類２点、ロクロ調整によらない甕２点、他に土製支脚が１点出土している。埋土２層からは、須恵器では蓋２点、甕９点、土師器では杯ＩＡ－１類６点(２)、ＩＢ類13点(３・４)、ＩＡ－３類１点、ロクロ調整によらない甕54点、高杯１点が出土している。埋土１層からは、須恵器蓋１点、土師器杯ＩＡ－１類１点、ＩＢ類４点、ロクロ調整によらない甕13点が出土している。

〈西地区〉

ＳＩ235竪穴住居跡（第６図）

西地区北東部の第３層でほぼ全形を検出した竪穴住居跡である。ＳＩ236・239竪穴住居跡、ＳＫ256土坑と重複し、ＳＩ236・239より新しく、ＳＫ256より古い。残存状況は比較的良好で壁の高さは25～30cmである。平面形は方形をなし、規模は西辺7.5m、南辺6.8mである。方向は西辺で測ると北で約５度西へ偏する。

床は全面地山ブロックを多量に含む黒色土の貼床で、ほぼ水平である。カマドは北辺のほぼ中央に付設されており、調査区の関係で焚口部を検出しただけであるが、貼床の上面より灰白色粘土で構築されている。

焚口部の内幅は約0.4m、奥壁は約0.6mである。また焚口部の前面には貼床を壊す1.2×0.8mほどの皿状のピットが掘りこまれており、炭化物、焼土を多量にふくむ灰黄褐色土が充満している。

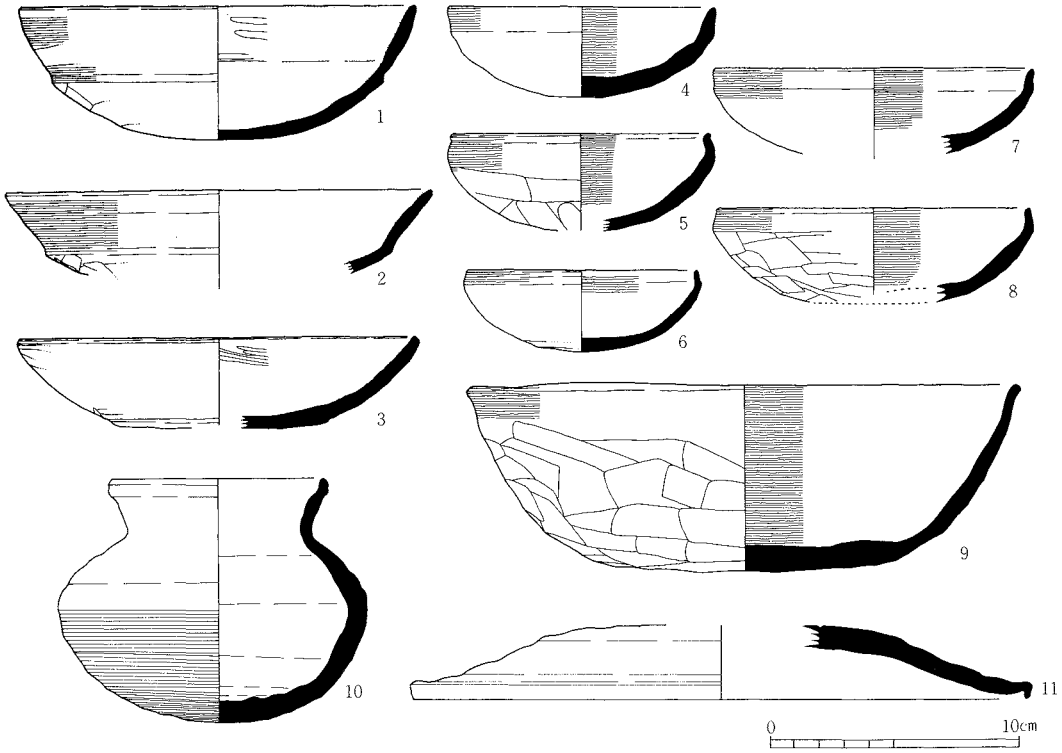
周溝は貼床上面で検出しており、東・西両辺にだけ認められる。幅20～25cm、深さ３～６cmで、断面形をゆるやかなＵ字形をなす。埋土は住居内の堆積土と区別される。

柱穴は径0.4～0.7mの円形をなし貼床下で住居跡の対角線上に４個検出されている。柱痕跡は径15～20cmである。

住居内の埋土は３層に大別される。第１層は地山細粒や小ブロックをふくむ黒褐色土ないし暗褐色土であり、住居の中央部に厚く堆積し直接床面を覆う。色調や地山細粒やブロックの大きさ・量で７層に細分される。第２層はカマドの構築に用いた灰白色粘土ブロック・炭化物・焼土や地山ブロックを多くふくむ褐色土を主体とし、住居北半からカマド周辺まで直接床面に堆積している。４層に細分される。第３層は地山小ブロックをふくむ黒色土と均質な暗褐色土で南壁ぎわに堆積し直接床を覆う。２層に細分される。

遺物は床面・埋土・カマド内堆積層から出土しており、須恵器、土師器、平瓦、鉄製品

がある(第12図)。床面からは土師器杯ＩＡ－２類･１点(３)と、ロクロ調整によらない甕が３点出土している。カマド内堆積層からは、土師器杯ＩＢ類４点、ロクロ調整によらない甕21点、高杯２点が出土している。埋土２・３層からは須恵器では短頸瓶１点(10)、高杯１点､甕５点､土師器杯ではＩＡ－１類11点､ＩＡ－２類２点､ＩＢ類18点(４)、ＩＡ－３類１点、ロクロ調整によらない甕94点が出土している。埋土１層からは須恵器では杯３点、蓋１点(11)、瓶２点、甕26点、土師器では杯ＩＡ－１類39点(１・２)、ＩＡ－２類２点、ＩＢ類24点(５～８)、鉢１点(９)、ロクロ調整によらない甕403点､高杯２点、壺１点（丹塗）の他、格子目叩きの平瓦５類（註１）１点と不明鉄製品２点が出土している。



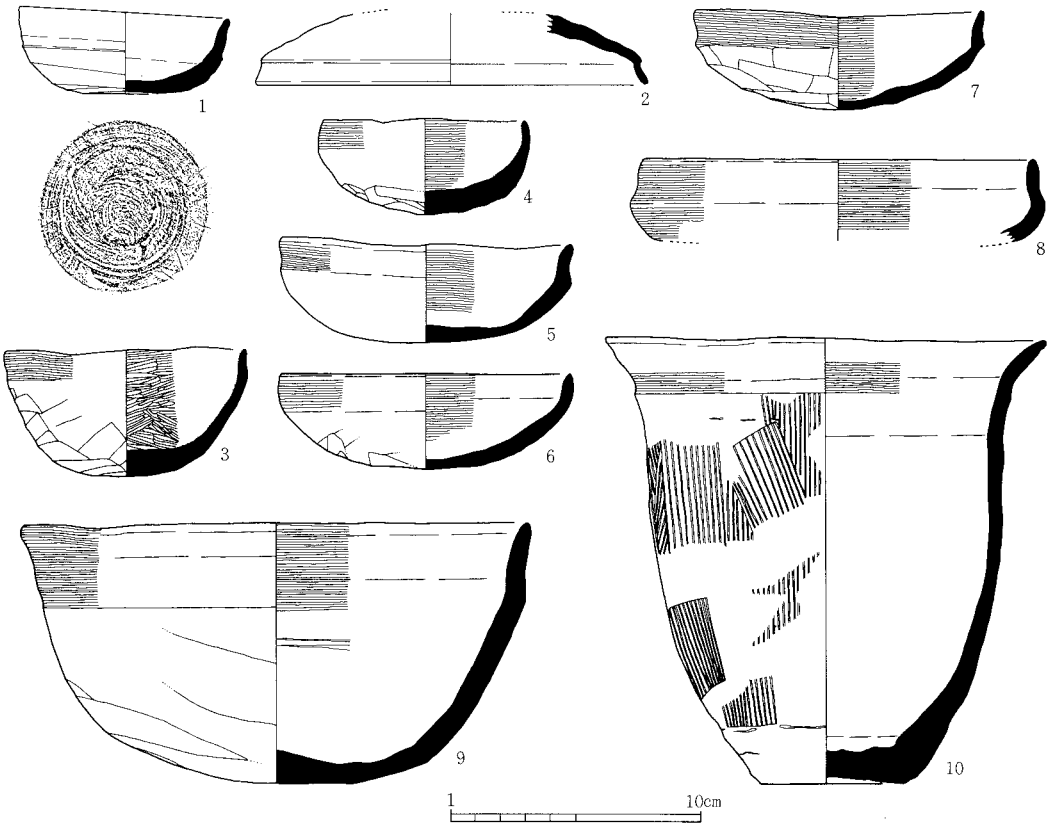
1	埋土１層	土師器	杯	ＩＡ－１類	7	埋土１層	土師器	杯	ＩＢ類
2	埋土１層	土師器	杯	ＩＡ－１類	8	埋土１層	土師器	杯	
3	床　　面	土師器	杯	ＩＡ－２類	9	埋土１層	土師器	鉢	
4	埋　土 ２・３層	土師器	杯	ＩＢ類	10	埋　土 ２・３層	須恵器	短頸瓶	
5	埋土１層	土師器	杯	ＩＢ類	11	埋土１層	須恵器	蓋	天井部欠損
6	埋土１層	土師器	杯	ＩＢ類					

第12図　ＳＩ235住居跡出土土器

ＳＩ236竪穴住居跡（第６図）

西地区北東部の第３層で東半部を検出した竪穴住居跡である。ＳＢ218建物跡、ＳＩ235・237竪穴住居跡と重複し、いずれよりも古い。残存状況は比較的良好で壁の高さは0.3～0.5ｍである。調査区の関係で全形は捉えられなかったが、平面形は方形をなすと考えられ、規模は東辺約7.2ｍ、南辺3.5ｍ以上である。方向は東辺で測ると北で約12度西へ偏する。

床は全面地山ブロックを多くふくむ暗褐色土の貼床で、ほぼ水平である。カマドは北辺に付設されており、貼床上面より灰白色粘土で構築されている。検出できたのは東袖と焚口部東半だけである。またカマドの東には径0.6ｍ、深さ0.3ｍの浅いピットが認められる。埋土は地山小ブロック、灰、灰白色粘粒を多量にふくむ暗褐色土である。周溝は貼床上面



1	埋土１層	須恵器	杯		6	埋土１層	土師器	杯	ＩＢ類
2	埋土１層	須恵器	蓋		7	埋土１層	土師器	杯	ＩＢ類
3	埋土１層	土師器	杯	ＩＡ－１類	8	埋土１層	土師器	杯	ＩＢ類
4	埋土１層	土師器	杯	ＩＡ－１類	9	埋土１層	土師器	鉢	
5	埋土１層	土師器	杯	ＩＢ類	10	埋土１層	土師器	甕	

第13図　ＳＩ236住居跡出土土器

で認められ、北辺・東辺・南辺と連続している。幅20～30cm、深さ５～12cmで、断面形はゆるやかなＵ字形をなす。埋土は地山小ブロックをふくむ黒褐色土１層で住居内埋土とは区別される。

柱穴は貼床上面の２か所で検出しているが、柱は抜き取られている。

住居内の埋土は３層に分けられる。第１層は地山細粒を少量ふくむ暗褐色土で住居中央部にみられる。第２層は木炭、灰白色粘土ブロック、地山ブロックを少量ふくむ暗褐色土でカマド周辺に堆積するカマドの崩壊土と考えられる。第３層は地山ブロックや木炭を少量ふくむ極暗褐色土で壁ぎわに厚く堆積し、直接床面を覆う。

遺物は床面と埋土から須恵器と土師器が出土している(第13図)。床面からは土師器だけが出土しており、杯ＩＡ－１類１点、ロクロ調整によらない甕５点出土している。埋土３層からは土師器だけが出土しており、杯ＩＢ類２点、ロクロ調整によらない甕４点出土している。埋土２層からは須恵器では甕が２点、土師器では杯ＩＢ類１点、ロクロ調整によらない甕６点出土している。埋土１層からは須恵器では、切り離しが回転糸切りで、回転ヘラケズリ調整の杯１点(１)、蓋１点(２)、甕１点、土師器では杯ＩＡ－１類９点（３・４)、ＩＢ類14点(５・６・７・８)、ロクロ調整によらない鉢１点(９)、ロクロ調整によらない甕112点（10）が出土している。

ＳＩ238竪穴住居跡（第６図）

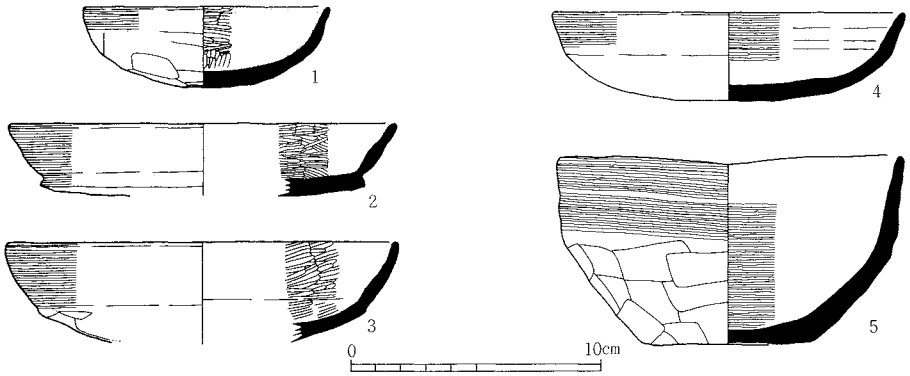
西地区東南部の第3層で西半部を検出した竪穴住居跡である。ＳＢ219･220建物跡、ＳＤ243溝と重複し、ＳＢ220、ＳＤ243より新しくＳＢ219より古い。残存状況は非常に悪く、特に北辺は壁がほとんど残存していない。調査区の関係で全形を捉えられなかったが方形をなすと考えられ、規模は西辺約6.1ｍ、北辺5.1ｍ以上である。方向は西辺で測ると北で約1度西へ偏する。

床は西辺付近を除き地山ブロックを多量にふくむ黒褐色土の貼床で、ほぼ水平である。カマドは北辺の中央付近に付設されたと考えられるが、カマドの袖の一部を検出しただけである。カマドは灰白色粘土で構築されており、両袖末端は１個体の土師器の甕を半割して埋めこみ補強されている。またカマドの前方で径80cm、深さ10cmほどの皿状のピットを検出しているが、これは底面全体に灰白粘土を貼り付けている。

周溝は北辺西半部から西辺・南辺にかけて認められ、幅15～25cm、深さ３～８cmで、断面形はゆるやかなＵ字形をなす。埋土は地山ブロックをふくむ暗褐色土１層で住居内埋土と区別される。

柱穴は貼床上面より３か所で検出している。径0.3～0.5ｍの円形をなし、いずれの柱穴でも径15～20cmの柱痕跡が確認されている。

住居内の埋土は１層で地山細粒や木炭をふくむ黒褐色土である。



1	埋土１層	土師器	杯	ＩＡ－１類	4	埋土１層	土師器	杯	ＩＢ類
2	埋土１層	土師器	杯	ＩＡ－１類	5	埋土１層	土師器	鉢	
3	埋土１層	土師器	杯	ＩＡ－１類					

第14図　ＳＩ238住居跡出土土器

遺物は埋土と貼床とカマドから須恵器・土師器・土製支脚が出土している（第14図）。

貼床からは、土師器のロクロ調整によらない甕が８点出土している。カマド西袖から須恵器蓋１点、また東西両袖からロクロ調整によらない土師器の甕が１個体分出土している。埋土からは須恵器では杯１点、甕４点、土師器では杯ＩＡ－１類21点（１・２・３）、ＩＡ－２類１点、ＩＢ類10点（４）、ロクロ調整によらない鉢１点（５）、ロクロ調整によらない甕113点、土製支脚２点（図版10－８）出土している。

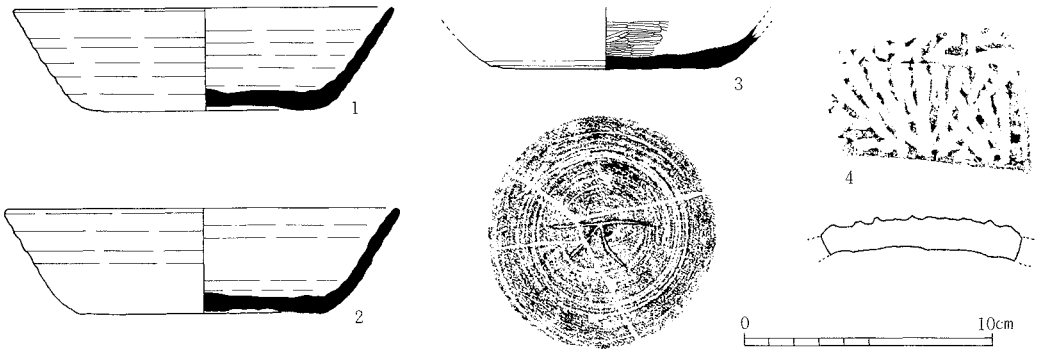
ＳＩ240竪穴住居跡（第８図）

西地区中央部の第４層で全形を検出した竪穴住居跡である。ＳＢ227建物跡と重複しこれより新しい。残存状況は悪く壁の高さは15～20cmである。平面形はほぼ正方形をなし規模は一辺約３ｍである。方向は南辺で測ると東で約１度北へ偏する。

床は全面地山ブロックをふくむ暗褐色土の貼床で、ほぼ水平である。カマド本体は削平されて存在しないが、東壁中央のやや南寄りに東へ突出した部分があり、その部分の壁が焼けていることを考えあわせればここにカマドが付設されていたと考えられる。

周溝、主柱穴は認められない。

住居内の埋土は６層認められる。第１層は炭化物・焼土粒や地山ブロックを少量ふくむ黒色土で住居中央部に堆積している。第２層は地山ブロックをふくむ黒色土で、若干炭化物もふくみ、住居中央部に堆積している。第３層は炭化物を多量に、また焼土粒、地山ブロックを少量ふくむ黒色土で住居跡の西半部に厚く堆積し直接床を覆う。第４層は地山小ブロック・細粒を多量に、また焼土粒を若干ふくむ黒色土で住居東半部に厚く堆積し直接床を覆う。第５・６層は地山細粒を多くふくむ黒色土で壁ぎわに堆積した最初の層である。



1	埋土 3・4層	須恵器	杯	手持ちヘラケズリ調整	3	埋土 5・6層	土師器	杯	ⅡA類、ヘラ書き「大」カ
2	埋土 1・2層	須恵器	杯	ヘラキリ無調整	4	埋土 3・4層	瓦	平瓦	Ⅱ類

第15図　S I 240住居跡出土遺物

遺物は床面と埋土から須恵器・土師器の他に平瓦が1点出土している(第15図)。床面からは須恵器の甕が1点出土している。埋土5・6層からは須恵器では手持ちヘラケズリ調整の杯1点をふくむ杯3点、蓋1点、甕8点、土師器では杯ⅠA－1類1点、ⅠB類2点、ⅡA類（底部は回転ヘラケズリ調整）1点(3)、ロクロ調整によらない甕14点、不明10点出土している。埋土3・4層からは須恵器では切り離しが回転ヘラ切りで手持ちヘラケズリ調整の杯1点（1）をふくむ杯2点、蓋1点、甕12点、土師器では杯ⅠA－1類1点、ⅠB類3点、ロクロ調整によらない甕29点、不明11点の他平瓦2類(註2)1点(4)出土している。埋土1・2層からは須恵器ではヘラ切り無調整の杯1点(2)、切り離し不明で回転ヘラケズリ調整の杯1点をふくむ杯5点、土師器では杯ⅠA－1類3点、ロクロ調整によらない甕13点出土している。

S I 241竪穴住居跡（第8図）

西地区西半部の第4層で西半部を検出した竪穴住居跡である。SB225・226・230建物跡、SD252溝と重複し、SB225・226、SD252より新しく、SB230より古い。残存状況は極めて悪く、壁の高さは3～13cmである。東辺は調査区の関係で検出していないが平面形は方形をなすと考えられ、規模は西辺約3.0m、北辺3.3m以上である。方向は北辺で測ると東で約3度南へ偏する。

床は西辺付近を除くと、地山ブロックをふくむ暗褐色土による貼床で、中央部がややくぼむ。

カマド・周溝・主柱穴は検出できなかった。

住居内の埋土は1層で地山ブロックを多量にふくむ黒褐色土で、炭化物・焼土を比較的多くふくむ。

遺物は床面から出土していないが埋土よりすべて破片資料であるが須恵器・土師器が出土している。須恵器では蓋１点、甕４点、土師器では杯ＩＡ－１類５点、ＩＢ類７点、ロクロ調整によらない甕35点出土している。

以上の他に竪穴住居跡にはＳＩ162・237・239・242がある。これらは部分的な検出のため、出土遺物が少ないが、出土した土師器についてみると、ロクロ調整によるものがなく、杯ではＩＡ－１類とＩＢ類が主体をなして共存している。

(4) 土　　坑

〈西地区〉

ＳＫ256土坑（第６図）

西地区北東部の第３層で部分的に検出した土坑である。ＳＩ235・239竪穴住居跡と重複し、いずれよりも新しい。平面形は不明であるが規模は南北約３ｍ、東西約3.3ｍ以上で、深さは0.3ｍほどの皿状をなす。

埋土は１層で地山細粒を少量含む黒褐色土である。

遺物は須恵器では杯１点、頸部を欠く長頸瓶１点(17図２)、不明１点、土師器では杯ＩＡ－１類９点、ＩＢ類21点(17図１)、ロクロ調整によらない甕51点出土している。

ＳＫ275土坑（第８図）

西地区中央部の第４層でほぼ全形を検出した土坑である。ＳＢ224建物跡と重複しこれより新しい。平面形は円形をなす径約1.6ｍ、深さ0.3ｍほどの土坑である。埋土は地山小ブロックを含む黒褐色土１層である。遺物は埋土より土師器の杯ＩＡ－１類１点、ＩＢ類４点が出土している。

ＳＫ257土坑（第８図）

西地区中央部の第４層でほぼ全形を検出した土坑である。ＳＢ223･224建物跡と重複し、いずれよりも新しい。平面形は隅丸方形をなし北辺約2.4ｍ、西辺約２ｍ、深さ0.3～0.4ｍである。北辺中央部と西辺南半部の壁は少しオーヴァーハングしている。埋土は地山小ブロックをふくむ黒褐色土１層である。遺物は須恵器では杯１点、土師器ではロクロ調整によらない甕９点出土している。

ＳＫ259土坑（第８図）

西地区南西部の第４層で全形を検出した土坑である。ＳＢ228と重複し、これより新しい。平面形は不整方形をなし、規模は北辺約1.2ｍ、西辺約1.1ｍで、深さ約0.2ｍである。埋土は地山細粒を含む黒褐色土１層である。遺物は須恵器では杯３点、甕２点、土師器では杯ＩＡ－１類３点、ロクロ調整によらない甕17点が出土している。

ＳＫ260土坑（第８図）

西地区南西部の第４層で全形を検出した土坑である。ＳＢ227･228･229建物跡と重複し、ＳＢ229より古くＳＢ227･228より新しい。平面形は不整円形をなし、規模は径2.6～2.7ｍ、深さは0.2ｍほどである。埋土は地山小ブロックを含む黒色土である。遺物は須恵器では杯３点、甕27点、不明１点、土師器では杯ＩＡ－１類５点、ＩＢ類２点、ロクロ調整によらない甕23点が出土している。

ＳＫ261土坑（第８図）

西地区北西部の第４層で全形を検出した土坑である。ＳＢ230建物跡、ＳＤ252溝と重複し、いずれよりも新しい。平面形は楕円形をなし、規模は長径約1.2ｍ、短径0.9ｍ、深さ0.2ｍほどである。埋土は地山小ブロックを含む黒色土である。

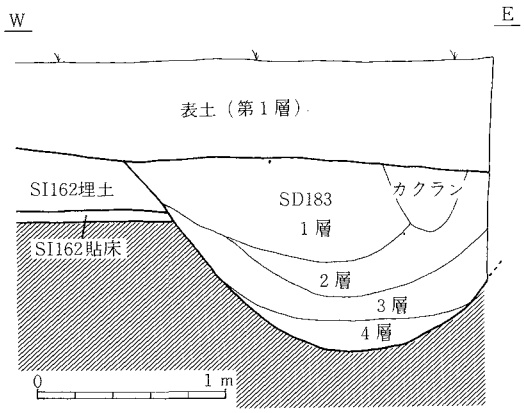
遺物はほぼ完形の土師器鉢（17図３）１点の他に須恵器では甕１点、土師器では杯ＩＡ－１類２点、ＩＢ類１点、ロクロ調整によらない甕16点が出土している。

(5)　溝

〈東地区〉

ＳＤ183溝（第５・16図）

第３層で検出した調査区の東縁に沿って続く南北溝である。この溝は昨年度の第３次調査で検出した中世大崎氏の名生城に関係する溝ＳＤ183の北延長線上に位置することより、これに続く溝と考えられる。北端部はさらに調査区外へ延びてゆく。ＳＢ211･216建物跡、ＳＥ254・255井戸、ＳＤ182と重複し、ＳＢ211・216より新しいがＳＥ254・255、ＳＤ182より古い。幅は場所によってやや異なるが上端で2.0～2.5ｍ、底で0.6～1.0ｍ、深さ0.6～1.0ｍで断面形はＵ字形をなす。方向は北で約10度東へ偏する。埋土は北端部の断面を参考にすると（第16図）４層認められ自然に堆積した状況を示す。第１層は地山細粒を含む暗褐色土、第２層は地山ブロックを多量に含む極暗褐色土、第３層は地山細粒を含む極暗褐色土、第４層は地山小ブロックを多量に含む暗赤褐色土である。



第16図　ＳＤ183溝断面図

遺物は比較的多く出土しているが大部分が小破片である。須恵器69点、土師器112点、転用硯（図版10－５）、中世陶器

3点、平瓦2点、丸瓦1点が出土している。須恵器は杯7点、高台杯3点、蓋2点（17図4）、瓶類2点、甕54点出土している。この中で杯についてみると、静止糸切りで回転ヘラケズリ調整のもの1点、切り離し技法が不明で回転ヘラケズリ調整のもの2点、同じく手持ちヘラケズリ調整のもの3点(17図7)。また高台杯の1点は双耳付きのものである(17図5)。

土師器は杯ＩＡ－1類7点、ＩＢ類17点、ロクロ調整による（II類）高台杯1点、ロクロ調整によらない甕78点、高杯1点、不明が3点ある。

平瓦は凸面が縄叩きで、凹面が布目のものとスリ消したものが各1点出土している。

ＳＤ243溝（第5・6図）

第3層で検出した南北・東西両方向の一連の溝である。南北溝は東西両地区にわたって約41ｍ、また東西溝は東地区で約5ｍ検出しており、両溝は東地区南半部で連結する。南北溝の南半部はほぼ南北発掘基準線に対してほぼ沿って続くが、北半部は西へ大きく曲がっている。ＳＢ215・217・219・220建物跡、ＳＩ237・238竪穴住居跡と重複し、ＳＢ215・219、ＳＩ237・238より古いがＳＢ217・220との新旧関係は不明である。幅は上端で約0.3～0.5ｍ、底で約0.2～0.3ｍ、深さ約0.2～0.5ｍで断面形はＵ字形をなす。埋土は地山細粒を含む黒色土1層である。遺物は須恵器甕の口縁部破片1点、ロクロ調整によらない土師器甕の体部破片1点が出土している。

〈西地区〉

ＳＤ251溝（第7・8図）

西地区中央部の第4層で検出したゆるやかに蛇行する南北溝である。ＳＢ221・222・223建物跡と重複し、ＳＢ221より新しいが、ＳＢ222・223との新旧関係は不明である。幅約0.5～0.6、深さ約0.2ｍで断面形はゆるやかなＵ字形をなす。埋土は地山小ブロックを含む黒褐色土である。出土した遺物はない。

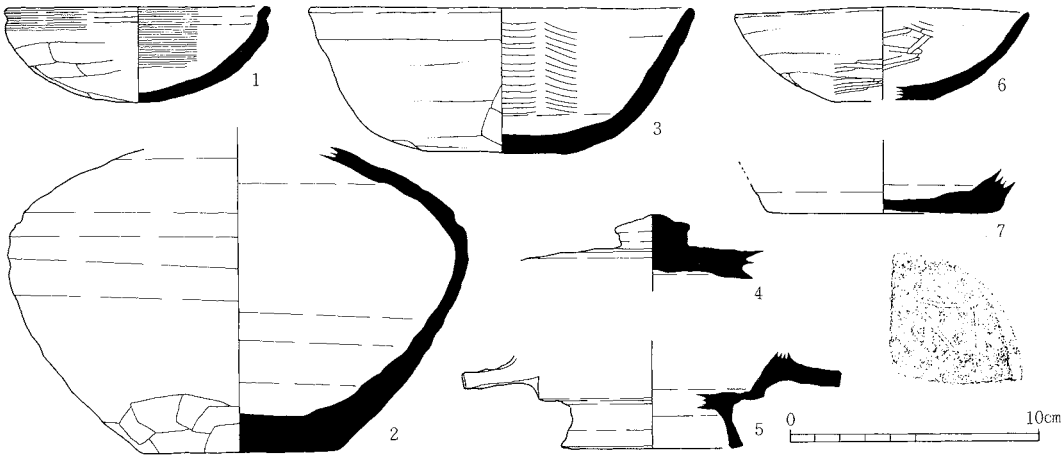
ＳＤ252溝（第8図）

西地区西部の第4層で検出した蛇行する南北溝である。ＳＢ228～230建物跡、ＳＡ231柱列跡、ＳＩ241竪穴住居跡と重複し、ＳＢ229・230、ＳＡ231、ＳＩ241より古いがＳＢ228との新旧関係は不明である。幅約0.4～0.6ｍ、深さは最も良好に残存していたところで約0.1ｍであり、断面形はゆるやかなＵ字形をなす。埋土は地山小ブロックを含む黒褐色土である。遺物は須恵器小片1点、土師器では杯ＩＡ－1類5点、ＩＢ類5点、ＩＡ－3類(17図6）1点、ロクロ調整によらない甕1点が出土している。

ＳＤ253溝（第8図）

西地区南西部の第4層で検出した東西溝である。ＳＢ229建物跡と重複し、これより新し

い。幅約0.5～0.6ｍ、深さ約0.2ｍで断面形はゆるやかなＵ字形をなす。埋土は地山ブロックを含む暗褐色土である。遺物はロクロ調整によらない土師器甕の体部破片が７点出土している。



1	ＳＫ256土坑埋土１層	土師器	杯	ＩＢ類	5	ＳＤ183溝埋土	須恵器	高台杯	双耳
2	ＳＫ256土坑埋土１層	須恵器	長頸瓶	頸部以上欠損	6	ＳＤ252溝埋土	土師器	杯	ＩＡ－３類
3	ＳＫ261土坑埋土	土師器	鉢		7	ＳＤ183溝埋土	須恵器	杯	ヘラ書き
4	ＳＤ183溝埋土	須恵器	蓋						

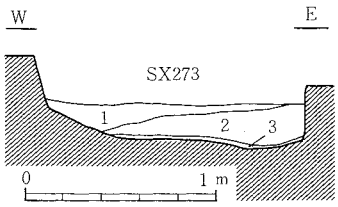
第17図　ＳＫ256・261土坑、ＳＤ183・252溝出土土器

(6)　窯　　跡

ＳＸ273窯跡（第８・18図）

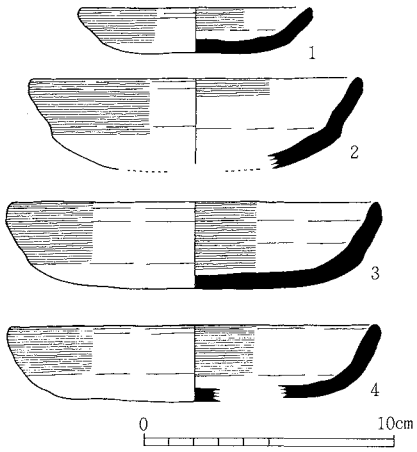
西地区北西部の第４層で全形を検出した窯跡である。平面形はゆがんだ瓢箪形をなす。規模は長さ約1.5ｍ、西側のふくらみの最大幅約0.7ｍ、東側のふくらみの最大幅約0.6ｍ、深さが最も深い東側で約0.3ｍである。西壁はやや傾斜しているが、中央部のくびれより東側の側壁は垂直もしくは少しオーヴァーハングしており焼けて非常に硬くなっている。底面は西側が東へ傾斜し中央部でほぼ水平になるが、東側で浅くくぼむ。底面に顕著な焼け面は認められない。

埋土は３層に分かれる（第18図）。第１層は焼土を含む黒褐色土、第２層は焼け礫を主体とする層、第３層は焼土を多く含む黒褐色土である。



第18図　ＳＸ273窯跡断面図

遺物は埋土１・２層から出土しており、手ずくねのかわらけと土師器がみられる。かわらけはすべて杯の



第19図　ＳＸ273窯跡出土土器

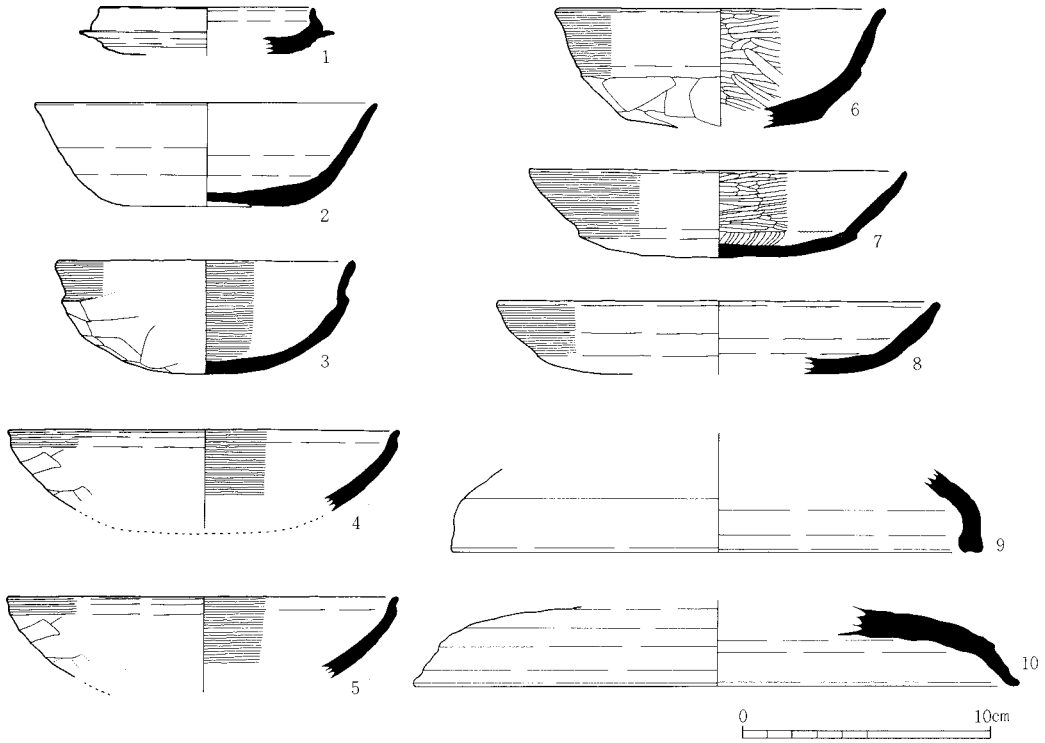
破片資料で10数個体分出土している。これには直径15cmほどの大形のものと直径９cmほどの小形のものとがある。両者とも内面はナデ調整、外面口縁部は横ナデ調整、体部～底部は不定方向のナデ調整あるいは手でおさえたような痕跡がみられる。これらの破片のなかには火熱により内外面が薄く剝離したものが多くみられる(第19図)。

土師器は４点出土しており、すべて小破片のロクロ調整によらないもので、この中には火熱をうけて黒色処理が飛んだものなどがある。この遺構は側壁が著しく焼けていることや内部からかわらけが一括して出土していること、さらに破片には火熱によって薄く剝離したものが多くみられることなどより、かわらけを焼成した施設と考えられる。土師器は２次的なまぎれこみとみられる。

(7)　第１・２層出土の遺物（第20図）

第２層から出土した遺物には少量の須恵器・土師器がある。須恵器では杯、蓋(20図10)、長頸瓶、甕、土師器では杯、甕がある。このうち須恵器の杯では、静止糸切りで底部周縁・体部下端が回転ヘラケズリ調整のもの、ヘラ切り無調整のもの、底部全面手持ちヘラケズリ調整のものがみられる。また土師器はロクロ調整によるものがみられず、杯ではＩＡ－１、ＩＡ－２、ＩＢ類がある。

第１層から出土した遺物には須恵器、土師器の他、中世陶器２点(図版10－１・２)、青磁３点(図版10－４)、円面硯１点(図版10－３)、転用硯１点(図版10－５)、土錘１点（図版10－６)、カマド支脚片２点、丸瓦、平瓦、砥石、鉄製品などがある。須恵器ではヘラ切り無調整の杯(20図２)、口縁部が内傾し蓋の受部をもつ杯(20図１)、高台杯、高杯、蓋(20図９)、長頸瓶、甕がみられる。土師器では、内面ヘラミガキ調整で内黒、口縁部外面ナデ調整の杯ＩＡ－１類(20図６・７・８)、内面・口縁部外面ナデ調整の杯ＩＢ類(20図３・４・５)、が主体を占めるが、他に杯ＩＡ－２類、杯ＩＡ－３類、また、ロクロ調整による内黒の杯（ⅡＡ類）１点、天井部が回転ヘラケズリ調整の蓋１点、ロクロ調整によらない高杯、甕、甑（１点）がみられる。また、青磁はいずれも皿類の破片とみられる。



1	第 1 層	須恵器	杯	有蓋杯身	6	第 1 層	土師器	杯	ＩＡ－1類、黒色処理不明瞭
2	第 1 層	須恵器	杯	ヘラキリ無調整	7	第 1 層	土師器	杯	ＩＡ－1類、
3	第 1 層	土師器	杯	ＩＢ類	8	第 1 層	土師器	杯	ＩＡ－1類
4	第 1 層	土師器	杯	ＩＢ類	9	第 1 層	須恵器	蓋	天井部欠損
5	第 1 層	土師器	杯	ＩＢ類	10	第 2 層	須恵器	蓋	天井部欠損

第20図　第１・２層出土土器

註１　宮城県多賀城跡調査研究所『名生館Ｉ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第６冊 1981　このなかでおこなった瓦の分類による。

註２　註１とおなじ。

Ⅵ．考　　察

本調査は、昨年度実施した第３次調査で検出している官衙遺構の西方への広がりの把握とその性格の解明を目的として実施したものである。したがって本調査の成果は第３次調査の成果と相互に関連させて理解する必要がある。そこで、最初に本調査で検出した各遺構について遺構期を設定してその年代を検討し、その後に第３次調査との比較をおこない両調査を通した成果についてまとめることにする。

１　遺構期の設定と年代

ａ）各遺構の重複関係

本調査で検出した遺構には掘立柱建物跡19、門跡１、材木列による塀跡１、柱列１、竪穴住居跡10、かわらけの窯跡１のほか土坑・溝・井戸がある。これらの重複状況を整理すると下表のようになる。

東地区

①ＳＢ212 → ＳＩ233 → ＳＡ232・ＳＢ213 → ＳＥ255
　　ＳＩ233 → ＳＢ211 → ＳＤ183 → ＳＥ254
　　ＳＩ162 → ＳＢ211
　　ＳＩ162 → ＳＢ216 → ＳＤ183
②ＳＤ243 → ＳＢ215
※重複関係の不明なものＳＢ214・217

西地区

③ＳＩ239 → ＳＩ235 → ＳＫ256
　ＳＩ236 → ＳＩ235
　ＳＤ243 → ＳＩ237 → ＳＢ218
　ＳＢ220 → ＳＩ237
　ＳＩ237 → ＳＩ238 → ＳＢ219
④ＳＢ221 → ＳＤ251
　ＳＢ222 → ＳＤ251
⑤ＳＢ224 → ＳＢ223 → ＳＫ257
　ＳＢ224 → ＳＫ275
⑥ＳＢ228 → ＳＫ259
　ＳＢ228 → ＳＢ227 → ＳＫ260 → ＳＢ229 → ＳＤ253
　ＳＢ227 → ＳＫ260
　ＳＢ227 → ＳＩ240
　ＳＫ260 → ＳＢ229 → ＳＡ231
　ＳＩ242 → ＳＢ229
　ＳＤ252 → ＳＩ241 → ＳＢ230 → ＳＫ261
　ＳＢ225 → ＳＩ241
　ＳＢ226 → ＳＩ241
※重複関係のないものＳＸ273

ｂ）各遺構の特徴からの分類

つぎに各遺構について特徴を整理・分類をおこない、それらの重複状況を検討する。

(1) 建物跡・塀跡・柱列

建物跡などはその方向によって次の３群に分けられる。

Ａ：発掘基準線に対して北で西に20度前後偏する一群（ＳＢ212・214～217・220・222・224～226・228）

Ｂ：発掘基準線に対して北で東に10度ほど偏する一群（ＳＢ223・227）

Ｃ：発掘基準線にほぼ一致する一群（ＳＢ211・213・218・219・221・229・230、ＳＡ231・232）

これらＡ・Ｂ・Ｃ群について重複関係をみると、重複関係①では、ＳＢ212(Ａ)→ＳＩ233→ＳＢ211(Ｃ)・ＳＡ232・ＳＢ213(Ｃ)よりＡ→Ｃ、③ではＳＢ220(Ａ)→ＳＩ238→ＳＢ219(Ｃ)よりＡ→Ｃ、⑤ではＳＢ224(Ａ)→ＳＢ223(Ｂ)よりＡ→Ｂ、⑥ではＳＢ228(Ａ)→ＳＢ227(Ｂ)→ＳＫ260→ＳＢ229(Ｃ)→ＳＡ231(Ｃ)よりＡ→Ｂ→Ｃ→Ｃ、また同じく⑥でＳＢ225(Ａ)・ＳＢ226(Ａ)→ＳＩ241→ＳＢ230(Ｃ)よりＡ→Ｃという関係がそれぞれ把握され、Ａ→Ｂ→Ｃという新旧関係が矛盾なく成立する。すなわち、建物跡などではＡ：発掘基準線に対して北で西に20度前後偏する建物群→Ｂ：発掘基準線に対して北で東へ10度ほど偏する建物群→Ｃ：発掘基準線にほぼ一致する建物群と変遷していることが想定され、このことは本地区の遺構期を設定する際に重要な手懸となりうる。

つぎに各建物跡の柱穴の特徴をみると、柱穴には0.3～0.6ｍほどの小さなもので、形状が同一の建物跡でも不揃なものと、１ｍ前後の大きなもので形状が方形を基調とするものとがある。これを前述のＡ・Ｂ・Ｃ群の各建物跡についてみると、Ａ・Ｂ群の建物跡の柱穴は前者に限られるがＣ群の場合には両者がみられる。したがってＣ群の建物跡は柱穴が小さなもの（C_1群）と大きなもの（C_2群）に細分される。両者は重複がないため時期差があるかどうかは不明である。

なお、Ａ・C_2群ではそれぞれ同じ群の中で建物跡が重複することより細分が可能とみられるが、明瞭な基準を見い出し得ないためここでは一括しておくことにする。

以上により、建物跡などではＡ群→Ｂ群→Ｃ群と変遷していることが知られた。それぞれに属する遺構は

Ａ群：ＳＢ212・214・215・216・217・220・222・224・225・226・228

Ｂ群：ＳＢ223・227

C_1群：ＳＢ211・213・218・219・221、ＳＡ232　　C_2群：ＳＢ229・230、ＳＡ231

となる。

(2) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は部分的な検出にとどまったものが多いため、形態などの特徴によって分類

することは困難な状況にある。そこでここでは比較的良好に変遷が把握できた前述の各建物群との対応関係の把握を試みることにする。

重複関係①よりA群（SB212）→SI233→C_1群（SB211、SA232・SB213）、SI162→C_1群（SB211）、③よりA群（SB220）→SI238→C_1群（SB219）、SI236→SI237→C_1群（SB218）、⑥よりA群（SB225・226）→SI241→C_2群（SB230）、SI242→C_2群（SB229）、B群（SB227）→SI240といった関係が成立する。このなかでSI233・238・241はA群より新しくC群より古いことよりA～C群のあいだにおさまることは確実であり、これらと共存する可能性もあるが厳密な対応関係は限定できない。またSI162・236・237・242はC群より古く、SI240はB群より新しいことが判明しているが、各群の建物跡との対応関係は把握できない。なお、SI235・239は建物跡との重複関係をもたないため建物跡との対応関係は不明である。

(3) 土　坑・溝

土坑・溝は特徴より分類することが困難なため、竪穴住居跡と同様に各建物群との対応関係を検討することにする。

土坑ではSK260はB群のSB227より新しくC_2群のSB229より古いことが判明していることよりB群あるいはC群に対応する可能性が高い。そのほかはSK256がSI235より新しく、SK275・259はA群のSB224・228より、SK257はB群のSB223より、SK261はC_2群のSB230よりそれぞれ新しいことが捉えられるが、各群の建物跡との対応関係は限定できない。

溝ではSD243がA群のSB215より古く、SD183・251はC_1群のSB211・221より、SD235はC_2群のSB229よりそれぞれ新しく、SD252はSI241より古いことがわかるが、各群の建物跡との対応関係は限定できない。

これらのほかにSX273窯跡があるが、いずれの遺構とも重複していないため、他の遺構との新旧関係は把握できない。これについては次項で出土遺物の検討より年代を推定することにする。

C）各遺構の年代

遺物は大部分が竪穴住居跡から出土しており、その他の遺構から遺物がまとまって出土した例は少ない。そこで以下では出土遺物の多い竪穴住居跡から順に、比較的遺物のまとまって出土した各遺構について検討してゆく。

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は10棟検出している。このなかで全形を捉え完掘したものにはSI233・240住居跡があり、これらからは比較的多くの遺物が出土している。そこでここではまずSI

233・240の２棟の竪穴住居跡の年代を検討することにする。

ＳＩ233では床面と埋土から須恵器･土師器などが出土している。床面からの出土遺物は少なく須恵器では手持ちヘラケズリ調整の杯１点と甕１点、土師器では杯ＩＢ類１点と体部外面がハケ目調整の小形の甕が１点出土しているだけであり､年代の検討は困難である。しかし埋土からは比較的多くの遺物が出土しており、土器群の様相も良好に捉えられる。須恵器では蓋と甕、土師器では杯ＩＡ－１類８点、ＩＢ類19点のほか、ロクロ調整によらない甕が比較的多く出土している。このうち土師器杯ＩＡ－１類は内黒で口縁部外面ナデ調整のものでありこれは在地の栗囲式のものとみられる。また杯ＩＢ類は非内黒で内面と口縁部外面がナデ調整のいわゆる関東系の土師器である。このように土師器で栗囲式と関東系のものとが共存する土器群のあり方とそれぞれの特徴は、本遺跡第３次調査で検出した竪穴住居跡出土の土器群ときわめて類似している。これらのことからＳＩ233住居跡の埋没年代は８世紀前半頃と推定される(註１)。

ところで土師器で栗囲式と関東系のものとが共存する土器群のあり方とそれぞれの特徴は､ＳＩ162・235～239・241・242住居跡出土の土器群の様相ともきわめて類似している。したがってこれらの竪穴住居跡の埋没年代はＳＩ 233住居跡の年代とほぼ同様に考えられ８世紀前半頃と推定される。

ＳＩ240では､床面と埋土から須恵器・土師器と平瓦が１点出土しているが、ほとんどが破片資料である。床面からの出土遺物は須恵器の甕が１点出土しているだけであり、年代の推定はできない。埋土からは、須恵器では杯・蓋・甕が出土しており、このなかの杯ではヘラ切り無調整のもの､切り離し技法がヘラ切りで手持ちヘラケズリ調整のもの､切り離し技法が不明で手持ちヘラケズリ調整のものと回転ヘラケズリ調整のものが各１点認められる。土師器では杯ＩＡ－１類、ＩＢ類と回転ヘラケズリ調整の杯ⅡＡ類１点、ロクロ調整によらない甕がみられる。このなかの杯ⅡＡ類はロクロ調整によるものである。１点だけの出土であるが埋土３層から出土していることより、まぎれこみとは考えにくい。ロクロ調整の土師器が確認されているのは現在のところ宮城県では８世紀後半(767) に造営された伊治城からであり、そこでは竪穴住居跡でロクロ調整の甕とロクロ調整によらない杯・甕が共伴している場合と、ロクロ調整によらない杯・甕とロクロ調整による杯・甕が共伴する場合がみとめられている(註２)。またこのような土器群は多賀城跡出土の土器群でも認められその年代は８世紀末頃と推定されている(註３)。

以上によりＳＩ240住居跡の年代は８世紀末頃以降と考えておきたい。

(2) 土　　坑

土坑ではＳＫ260よりまとまって遺物が出土している。ＳＫ260からは須恵器・土師器の

杯・甕が出土している。このうち土師器はすべてロクロ調整によらないものであり、杯ではＩＡ－１類とＩＢ類が共伴している。このように栗囲式の杯ＩＡ－１類といわゆる関東系の杯ＩＢ類が共伴するあり方は前述のＳＩ233住居跡などと同様であり、ＳＫ260の埋没年代はやはり８世紀前半頃と推定される。

(3) 建　物　跡

Ａ群の建物跡については、直接その年代を示す資料がないが、ＳＢ212がＳＩ233より、ＳＢ220がＳＩ238より、ＳＢ225・226がＳＩ241より、ＳＢ224がＳＫ275よりそれぞれ古いことよりその年代が限定される。これらの竪穴住居跡・土坑のなかで遺物が比較的多く出土している。ＳＩ233・238・241は土師器では栗囲式の杯ＩＡ－１類といわゆる関東系の杯ＩＢ類が共伴するという共通した土器群の様相を示し、いずれもその年代は８世紀前半頃と考えられている。以上よりＡ群の年代は８世紀前半以前とみられる。

Ｂ群の建物跡についてもやはり直接年代を示す資料はないが、ＳＢ227がＳＫ260より古いことからその年代が限定される。ＳＫ260の埋没年代は出土した土器群が土師器では栗囲式の杯ＩＡ－１類といわゆる関東系の杯ＩＢ類が共伴するというＳＩ233・238・241などと共通した様相を示すことより８世紀前半頃と考えられる。したがって、Ｂ群の年代は８世紀前半以前であることが知れる。

Ｃ群の建物跡の年代についてみると、C_2群のＳＢ229の柱穴から比較的多くの土器が出土しており、これよりこの建物跡の構築年代が推定できる。柱穴からは須恵器では杯・高台杯・蓋・甕などが出土している。土師器はすべてロクロ調整によらないもので杯では栗囲式のＩＡ－１類といわゆる関東系のＩＢ類が共伴している。このような土器群のあり方は前述のＳＩ240を除く竪穴住居跡やＳＫ260と同様であることより、ＳＢ229の構築年代は８世紀前半以降と推定される。以上よりＣ群の年代は８世紀前半以降と考えられる。

(4) その他の遺構

以上のほかに前項で検討しなかったＳＸ273窯跡とＳＤ184・243溝がある。

ＳＸ273はかわらけを焼成したとみられる窯跡で、いずれも破片資料であるが杯10数個体分が出土している。これらの杯はすべて手ずくねで直径約15cmほどの大形のものと直径９cmほどの小形のものがみられる。両者はいずれも内面がナデ調整、口縁部外面が横ナデ調整のもので、体部から底部には不定方向のナデ調整や手でおさえたような痕跡が認められる。特に外面口辱部は強い横ナデのためやや内湾気味になる。焼成状況は良好で硬くしまっており、赤褐色あるいは黄褐色を呈する。このような特徴をもつ土器は岩手県平泉町柳之御所(註４)、毛越寺(註５)、無量光院跡(註６)、毛越Ａ遺跡(註７)、水沢市玉貫遺跡(註８)や、神奈川県鎌倉市鶴岡八幡宮(註９)などより出土した土器に類例が求められ、その年代

は12～13世紀と考えられる。なお、前述の各遺跡では手ずくねのものとロクロ調整のかわらけが共伴しているが、本遺跡のＳＸ273ではロクロ調整のものは認められなかった。

ＳＤ183から出土した遺物には、破片資料であるが中世とみられる甕の体部破片が認められる。したがってＳＤ183は、年代を限定できないが中世大崎氏の居城である名生城に関連する溝と考えられる。

またＳＤ243はＡ群の建物跡（ＳＢ215）より古い溝であるが、出土遺物がきわめて少なく、また小破片であるためその年代を限定することは困難である。

ｄ）遺構期の設定と年代

これまでみてきたように遺構の変遷を最も良くあらわすのは建物跡であり、他の遺構については遺構ごとの変遷を把握することは困難な状況にある。したがってここでは建物跡の変遷をもって遺構期の設定をおこなうこととし、Ａ群をＡ期、Ｂ群をＢ期、C_1・C_2群をＣ期として把握しておきたい。また出土遺物の検討結果より、ＳＸ273窯跡をＤ期、中世大崎氏の居城である名生城に関連するとみられるＳＤ183をＥ期と捉えておくことにする。

各遺構期の年代は前項で検討したように、Ａ期・Ｂ期は８世紀前半以前、Ｃ期はC_2群のＳＢ229の年代より８世紀前半以降、Ｄ期は12～13世紀、Ｅ期はＳＤ183が中世大崎氏の居城である名生城に関連するとみられるが限定できないため、ここでは中世として年代に幅をもたせておくことにする。

これらをまとめれば第１表のようになる。

遺構期	遺　　構	年　　代
Ａ　期	Ａ群の建物跡：ＳＢ212・214・215・216・217・220・222・224・225・226・228	８世紀前半以前
Ｂ　期	Ｂ群の建物跡：ＳＢ223・227	
Ｃ　期	C_1・C_2群の建物跡など：ＳＢ211・213・218・219・221・229・230、ＳＡ231・232	８世紀前半以降
Ｄ　期	ＳＸ273窯跡	12～13世紀
Ｅ　期	ＳＤ183	中世

第１表　第４次調査で設定された遺構期

なお、ＳＤ243については年代が限定できず性格も不明なためここでは遺構期としては捉えなかった。

２　第３次調査の成果との比較検討

第３次調査ではＡ・Ｂ・C_1・C_2・Ｄ期の５遺構期が設定され、第２表のようにまとめられている。

遺構期	遺構				年代
	掘立柱建物跡	竪穴住居	土坑	溝・土塁	
A 期	SB151・SB153 SB158・SB159		SK178 SK186 SK187		(7世紀末以降)
B 期	SB152・SB157 SB154・SB161 SB155・SB156				
C_1 期		SI162・SI168・SI174 SI163・SI169・SI175 SI164・SI170・SI176 SI165・SI171・SI177 SI166・SI172 SI167・SI173	SK184 SK188 SK185		8世紀前半頃
C_2 期	SB160A・B		SK189		8世紀後半頃
D 期				SX190・SD183 SD179・SD181 SD180・SD182	中世

第2表　第3次調査で設定された遺構期

これらの各遺構期とそれに対応する各遺構の特徴をあげると次のようになる。

A期は建物跡、土坑で構成される。建物跡の方向は発掘基準線に対して北で西に偏するもの（SB151・158・159）と東に偏するもの（SB153）の2群が認められる。建物跡の柱穴はいずれも0.3～0.6mほどの小規模なもので形状は同一の建物でも不揃である。年代は7世紀末～8世紀初頭頃と推定される。

B期は建物跡で構成される。建物跡の方向は発掘基準線にほぼ一致し、柱穴の形状・大きさはA期のそれとおなじである。年代は7世紀末～8世紀初頭頃と推定される。

C_1期は竪穴住居跡と土坑で構成される。年代は8世紀前半頃とみられる。

C_2期は建物跡と土坑で構成される。建物跡は方向が発掘基準線に対してほぼ一致し柱穴の大きさが1m以上で方形を基調とし、比較的遺物を多く含み、他の建物跡の柱穴の特徴と著しく異なる。年代は8世紀後半頃とみられる。

D期は中世大崎氏の居城である名生城に関連するとみられる土塁と溝である。

なお、C_1期として一括した竪穴住居跡は建物跡との新旧関係が把握できたものが少ないことからA・B期に属するものがふくまれている可能性もあるとみられた。以上のような第3次調査の成果と本調査の成果を比較してみたい。

ところで本調査における遺構期の設定は、これまでみてきたように最も良好に変遷を示

す建物跡を軸におこなわざるを得なかった。そこでここでは両調査を通じた遺構期の比較検討は、まず建物跡を中心におこなうことにし、その後、そのほかの各遺構については、建物跡との対応関係を検討することにする。

① 第3次調査のA期の建物跡には方向が発掘基準線に対して北で西に偏するものと東に偏するものがある。そして前者の特徴は本調査のA期に、また後者の特徴は本調査のB期にそれぞれ一致する。したがって、第3次調査では新旧関係が捉えられなかったためA期として一括していた建物跡は、ここで2遺構期に分けられる。すなわち、A_1期：方向が発掘基準線に対して北で西に偏する建物（SB151・158・159）→A_2期：方向が発掘基準線に対して北で東に偏する建物跡（SB153）となる。

② 第3次調査のB期の建物跡は方向が発掘基準線に対してほぼ一致し、柱穴は0.3～0.6mほどで形状が不揃である。これらの特徴は本調査のC期のC_1群と一致する。また第3次調査のC_2期の建物跡は、方向が発掘基準線に対してほぼ一致し、柱穴は1m以上で方向を基調とし、埋土に比較的多くの遺物をふくむ。これらの特徴は本調査のC期のC_2群と類似する。したがって第3次調査のB期とC_2期に対して本調査のC_1群とC_2群がそれぞれ対応すると考えられる。また第3次調査では、竪穴住居跡との重複関係や出土遺物の検討からB期→C_2期という新旧関係が把握されている。これをもとにすると本調査では新旧関係を捉えられなかったためC期として一括したC_1群、C_2群はC_1群→C_2群と変遷し、2遺構期に分けられることになる。すなわち、C_1期：方向が発掘基準線に対してほぼ一致し、柱穴が小さく不揃な建物跡など（SB211・213・218・219・221、SA232）→C_2期：方向が発掘基準線に対してほぼ一致し、柱穴が1m前後と大きく方形を基調とする建物跡など（SB229・230、SA231）となる。

以上の検討より第3次調査と第4次調査で検出された小館地区の建物跡全体の遺構期は第3表のようになる。

全体の遺構期	第3次調査の遺構期	第4次調査の遺構期	年　　代
第Ⅰ期	A_1　期	A　期	8世紀前半以前
第Ⅱ期	A_2　期	B　期	
第Ⅲ期	B　期	C_1　期	8世紀前半頃
第Ⅳ期	C_2　期	C_2　期	8世紀後半頃

第3表　第3・4次調査の遺構期の対応関係

年代については第Ⅰ・Ⅱ期が8世紀前半頃の竪穴住居跡より古いことから8世紀前半以前、第Ⅲ期はこの期の建物跡に8世紀前半頃の竪穴住居跡より新しいものと古いものの両者がみられることより8世紀前半頃、第Ⅳ期は第3次調査で検出されたSB160Aの構築時

期の年代より8世紀後半頃とすることができる。第Ⅰ・Ⅱ期については、第4次調査で第Ⅰ期の建物跡に重複するものがみられることから、比較的長期間にわたっていたものと考えられるので、第Ⅰ期の開始年代は7世紀の後半までさかのぼる可能性が強い。

竪穴住居跡についてみると、第3次調査では竪穴住居跡をC_1期として一括したが、B期との新旧関係を把握できたものは1例のみであった。また建物跡との対応関係についても、本調査と同様に厳密には把握できなかった。そこで竪穴住居跡については、第3次調査のものもふくめてここでは建物跡の遺構期との対応関係の可能性を指摘しておくにとどめる。

各遺構期との重複状況をみるとＳＩ240をのぞく竪穴住居跡には、第Ⅰ期より新しく第Ⅲ期より古いものとしてＳＩ233･238、第Ⅰ期より新しく第Ⅳ期より古いものとしてＳＩ241がある。また第Ⅰ期より新しいものとしてＳＩ170・173、第Ⅱ期より新しいものとしてＳＩ174、第Ⅲ期より新しいものとしてＳＩ175、第Ⅲ期より古いものとしてＳＩ236・237・162、第Ⅳ期より古いものとしてＳＩ242がある。以上よりＳＩ233・238が第Ⅰ期～第Ⅲ期に、ＳＩ241が第Ⅰ期～第Ⅳ期におさまることは確実である。そしてその他のものでも第Ⅰ期と重複するものでそれより古いものがなく、また第Ⅳ期と重複するものでそれより新しいものがないこと、さらに出土した土器群の様相が共通することから考えればいずれの竪穴住居跡も第Ⅰ期～第Ⅳ期におさまる可能性が高い。

なおＳＩ240は出土した土器の年代より第Ⅳ期に対応する可能性がある。

これら古代の遺構のほかに、12～13世紀とみられるＳＸ273窯跡と、ＳＸ190土塁、ＳＤ179～183溝がある。

ＳＸ190土塁、ＳＤ179～183溝は14世紀に奥州探題として下向した大崎氏の居城である名生城に関連する可能性が強く、これよりＳＸ273窯跡とＳＸ190土塁、ＳＤ179～183溝は共存するとは考えにくい。したがってここではＳＸ273窯跡を第Ⅴ期、ＳＸ190土塁、ＳＤ179～183溝を第Ⅵ期としてそれぞれ捉えておくことにする。

これまで第3・4次両調査の成果を検討した結果は第4表のようにまとめられる。

遺構期	第3次調査	第4次調査	年代
第Ⅰ期	ＳＢ151･158･159	ＳＢ212･214～217･220･222･224～226･228	8世紀前半以前
第Ⅱ期	ＳＢ153	ＳＢ223･227	
第Ⅲ期	ＳＢ152･154･155･156･157 161	ＳＢ211･213･218･219･221、 ＳＡ232	8世紀前半頃
第Ⅳ期	ＳＢ160Ａ・Ｂ	ＳＢ229･230、ＳＡ231	8世紀後半頃
第Ⅴ期		ＳＸ273	12～13世紀
第Ⅵ期	ＳＸ190、ＳＤ179～183	ＳＤ183	中世

第4表　小館地区全体の遺構期

3　ま　と　め

第4次調査は、小館地区における官衙の広がりとその変遷や構成の解明を目的として実施したものである。その結果、多数の掘立柱建物跡をはじめ塀跡、竪穴住居跡、かわらけの窯跡、溝などを検出した。そしてこれらの各遺構は、第3次調査の成果との比較検討の結果6遺構期に区分することができた。古代には7世紀後半にさかのぼる可能性の高い第Ⅰ期から8世紀後半頃の第Ⅳ期までの4遺構期の変遷が捉えられ、また12～13世紀にはかわらけを焼成したとみられる窯跡(第Ⅴ期)、中世には大崎氏の居城である名生城に関連するとみられる溝（第Ⅵ期）が存在したことを確認した。

このうち第Ⅰ～Ⅳ期には各期を通じて掘立柱の建物が存在することから、本地区が継続して官衙域の一部として機能していたことがわかる。しかしこれらの建物跡はいずれも小規模でその配置に特に計画性が認められないことより官衙の中枢部とはいえず、城内地区Ｂ期に後続するとみられた官衙の中枢部は、第3・4次調査区の東側のすでに削平された地区に存在したと考えられる。またこれらの古代の官衙遺構は、さらに西方へ広がることも明らかになり、本地区の官衙はかなり広範囲に分布していたものとみられる。

以上のように小館地区における官衙の広がりと変遷を把握したことは、名生館遺跡全体のなかでの官衙の分布や変遷を解明するうえで大きな成果であったといえよう。

なお、今回は城内地区における各遺構期との対応関係については触れなかった。これについては来年度再び城内地区を対象とした第5次調査を予定しており、その成果をまって検討することにしたい。また官衙の区画施設であるＳＡ232塀跡やＳＸ273窯跡、あるいは関東系の土師器の存在などが注目されるが、今回はこれらに関して触れることができなかった。今後資料の蓄積をまって充分に検討することにしたい。

註1　宮城県多賀城跡調査研究所『名生館遺跡Ⅲ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第8冊　1983

註2　宮城県多賀城跡調査研究所『伊治城跡Ⅰ～Ⅲ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3～5冊　1977～1979

註3　白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所　pp.1～38　1980

註4　平泉町教育委員会『柳之御所跡発掘調査報告書』　1983

註5　藤島亥治郎編『平泉』－毛越寺と観自在王院の研究－　1961

註6　文化財保護委員会『無量光院跡』埋蔵文化財発掘調査報告書第三　1954

註７　岩手県教育委員会他「毛越Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡」岩手県文化財調査報告書第54集『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』　pp.197～226　1980

註８　岩手県埋蔵文化財センター他「玉貫遺跡」岩手県埋文センター文化財調査報告書第18集『金ヶ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　pp.11～185　1981

註９　鎌倉市鶴岡八幡宮研修道場用地発掘調査団『研修道場用地発掘調査報告書』1983

〔付章〕多賀城関連遺跡調査第２次５か年計画の成果

当研究所では特別史跡多賀城跡の調査・研究と併行して、多賀城に関連する宮城県内の城柵・官衙遺跡についても５か年計画に基づく計画的な調査・研究を実施している。これは、多賀城を中心として展開された当地方の古代史を多角的に把握し、多賀城をその歴史的な背景の中に正しく位置づけることを目的とするものである。

昭和49年度を初年度とする第１次５か年計画では桃生郡河北町の桃生城跡と、栗原郡築館町の伊治城跡の発掘調査を実施し、多くの成果を収めた(第５表)。本年度は昭和54年度を初年度とする第２次５か年計画の最終年度にあたるので、以下、計画の実施状況とその成果の概要をまとめておきたい。

年　度	遺跡名	事　　業	内　　容
49年度	桃生城跡	地形図作成・第１次発掘調査	内郭地区および外郭線の調査
50年度	桃生城跡	第２次発掘調査	内郭地区および外郭線の調査
51年度	伊治城跡	地形図作成	
52年度	伊治城跡	第１次発掘調査	外郭線および郭内の調査
53年度	伊治城跡	第２次発掘調査	郭内の調査

第５表　多賀城関連遺跡調査第１次５か年計画の内容

１　計画の概要と実施状況

昭和53年の第14回多賀城跡調査研究指導委員会（委員長　伊東信雄東北大名誉教授）で承認された第２次５か年計画は第６表のとおりである。この計画では第１年次に伊治城跡、

年　次	遺跡名	事　業	調査面積	予　算	備　考
54年度	伊治城跡	発掘調査	1,000m²	4,000千円	内郭地区の調査
55年度	名生館遺跡	地形図作成		3,000千円	
		発掘調査	1,000m²	4,000千円	内郭地区
56年度	名生館遺跡	発掘調査	1,000m²	4,000千円	内郭地区
57年度	名生館遺跡	発掘調査	1,000m²	4,000千円	外郭線の調査
58年度	桃生城跡	発掘調査	1,200m²	4,000千円	内郭地区の調査
計			5,200m²	23,000千円	

第６表　多賀城関連遺跡調査第２次５か年計画（昭和53年策定）

第２年次から第４年次にかけて古川市の名生館遺跡、第５年次に桃生城跡の調査を行うこととした。伊治城跡の調査は第１次５か年計画における２年間の調査で把握できなかった内郭地区の検出を目的としたものである。また、名生館遺跡は中世に奥州探題の大崎氏が居城とした名生城の跡でもあるが、古代の瓦や土器などが多量に発見されることから、「玉造軍団」や「玉造塞」の跡と推定されてきた遺跡である。当研究所では考古学的・文献学的な検討を行なった結果、この遺跡を『続日本紀』天平９(737) 年４月29日条に初見する「玉造柵」の有力な擬定地とみなし、その解明を目的として３年間にわたる調査を組込んだのである。桃生城跡については、第１次５か年計画の第１年次と第２年次の調査で検出していた内郭地区を再度調査し、その規模と建物配置を確定しようとするものであった。

第２次５か年計画は順調に進み、昭和57年度までは計画通り実施したが、名生館遺跡の調査で次項に記すように当初の予想を上回る大きな成果が得られ、新たに未解決の問題が数多く生じた。そのため、昭和57年の第18回指導委員会の承認を得て計画を一部変更し、最終年次も継続して名生館遺跡の調査を実施し、桃生城跡の調査は昭和59年度を初年度とする第３次５か年計画に操り延べることとした。第２次５か年計画の実施状況は第７表のとおりである。

年　次	遺跡名	事　業	調査面積	予　算	備　考
54年度	伊治城跡	発掘調査	1,000㎡	4,000千円	内郭地区の調査
55年度	名生館遺跡	地形図作成		3,000千円	
		発掘調査	1,700㎡	4,000千円	城内地区の調査
56年度	名生館遺跡	発掘調査	2,000㎡	7,000千円	城内地区の調査
57年度	名生館遺跡	発掘調査	1,100㎡	7,000千円	小館地区・内館地区の調査
58年度	名生館遺跡	発掘調査	1,000㎡	7,000千円	内郭地区の調査
計			6,800㎡	32,000千円	

第７表　多賀城関連遺跡調査第２次５か年計画の実績

2　発掘調査の成果

(1)　伊治城跡の調査

第１年次の昭和54年度には伊治城跡の内郭地区の検出を目的として、遺跡中央部付近の２地区を対象に調査を実施した。その結果、両地区で小規模な掘立柱建物跡や８世紀末頃の多数の竪穴住居跡が検出され、多量の土師器、須恵器をはじめ、「城厨」の墨書土器、風字硯が出土するなどの成果を得たが、目的とした内郭の官衙を構成するような遺構は発見されなかった。

第１次５か年計画からの４年間にわたる発掘調査により、本遺跡の外郭は土塁と大溝で区画されていたこと、郭内には８世紀末頃の竪穴住居跡が各所に存在すること、「城厨」をはじめとする多数の墨書土器、瓦、硯、漆紙など官衙的な性格を示す遺物が出土することなどが判明したことにより、本遺跡が伊治城跡である蓋然性はより高まったと言えよう。しかし、調査面積がまだ遺跡全体の0.3%ほどときわめて少ないこともあり、遺跡全体の構造や変遷、内郭の位置などの解明は将来の調査の課題として残された。

(2)　名生館遺跡の調査

第２年次の昭和55年度から第５年次の昭和58年度までは玉造柵推定地である名生館遺跡の調査を実施した。本遺跡内には南北約1,000ｍ、東西約500ｍの広範囲にわたって土器や瓦の散布が認められる。このうち古代の瓦の散布は城内地区と小館地区の２か所に集中しており、これらの地区には瓦葺きの建物の存在が推定された。

昭和55年の名生館遺跡第１次調査は、まず多賀城創建期より古い段階の瓦が散布する城内地区を対象として実施した。その結果、７世紀末頃～９世紀頃にかけての多数の掘立柱建物跡や塀跡、竪穴住居跡、および中世の大崎氏に関わる大溝などが発見され、早くも本遺跡に古代の官衙が存在することをつきとめ、その変遷についての見通しを得るなど注目すべき成果が得られた。なかでも８世紀初頭の段階には山田寺系の単弁蓮花文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦などで葺かれた大規模な掘立柱建物を正殿とし、その両側にとりつく一本柱の塀で囲まれた官衙の中枢部があったことが判明した。また９世紀の竪穴住居跡から出土した「玉厨」の墨書土器などから、本遺跡が古代の玉造郡に関連する官衙の跡であることが明らかとなった。

昭和56年度の第２次調査では、おもに第１次調査で検出した８世紀初頭頃の官衙中枢部の規模や構造を解明することを目的とし、引き続き城内地区を対象とした調査を実施した。この調査では中枢部の西辺に桁行の長い南北棟掘立柱建物が柱筋を揃えて２棟存在することや、東辺は一本柱の塀で区画されていること、正殿の東にもこれと柱筋を揃えた建物が存在することなどがわかった。また東辺がほぼ確定したことにより、この中枢部の規模は東西約53ｍ、南北約61ｍであることも把握できた。この調査では他に多数の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、溝跡、中世の大溝なども発見されている。

昭和57年度の第３次調査は、対象地を多賀城創建期の瓦が採集されている小館地区に移し、城内地区に後続する官衙中枢部の検出をおもな目的として実施した。その結果、７世紀末頃～８世紀後半頃にかけての掘立柱建物跡や竪穴住居跡などが多数発見され、本遺跡の官衙がこの地区にも及んでいることが明らかになった。しかし、検出された掘立柱建物跡はいずれも小規模なもので、その配置にも明確な計画性は認められないことから、官

衙の中枢部とは考えられず、中枢部はすでに大きな削平を受けている本調査区の東側地区にあったものと考えられた。なお、小館地区の調査と併行して、多量の炭化米が散布することから倉庫跡の存在が予想された内館地区の調査も実施した。この地区でも古代の竪穴住居跡や中世の溝跡などいくつかの遺構が検出されたものの、炭化米は中世以降の土坑に起因することが判明し、倉庫跡などは発見されなかった。

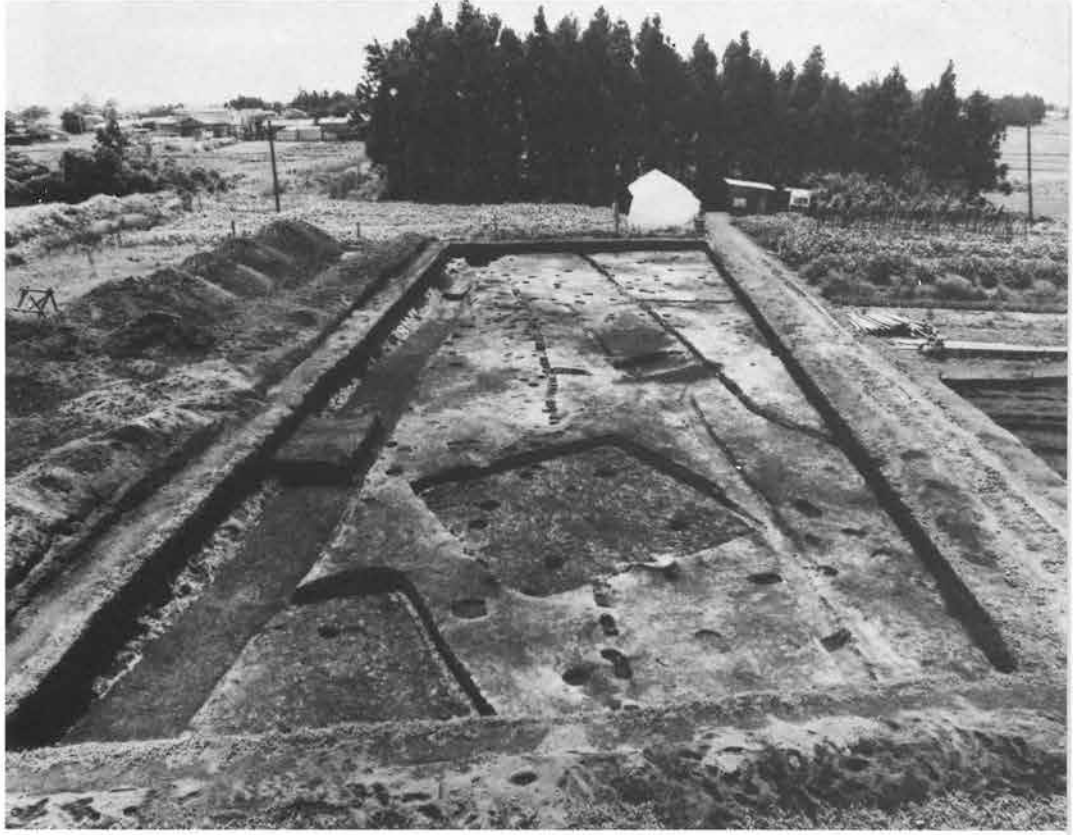
昭和58年度の第4次調査は、第3次調査に引き続き、小館地区における官衙遺構の分布状況とその変遷の把握を目的として実施した。その成果は本書に詳述したとおりである。

以上、多賀城関連遺跡調査第2次5か年計画の成果の概要を述べた。本計画の最大の成果は名生館遺跡で多賀城以前の官衙を検出したことにある。この調査により、8世紀後半まで律令国家の北限であった大崎地方に、7世紀段階にすでに官衙が成立していたことが判明したことは、律令政府による地方支配の浸透過程を解明するうえに大きな問題を提起するところとなった。

名生館遺跡については、遺跡範囲の確認、城内地区の官衙中枢部の南辺の確定、この官衙の瓦を生産した窯跡の追求など重要な問題が残されており、これらについては来年度から始まる第3次5か年計画に組み込んでゆくこととしている。

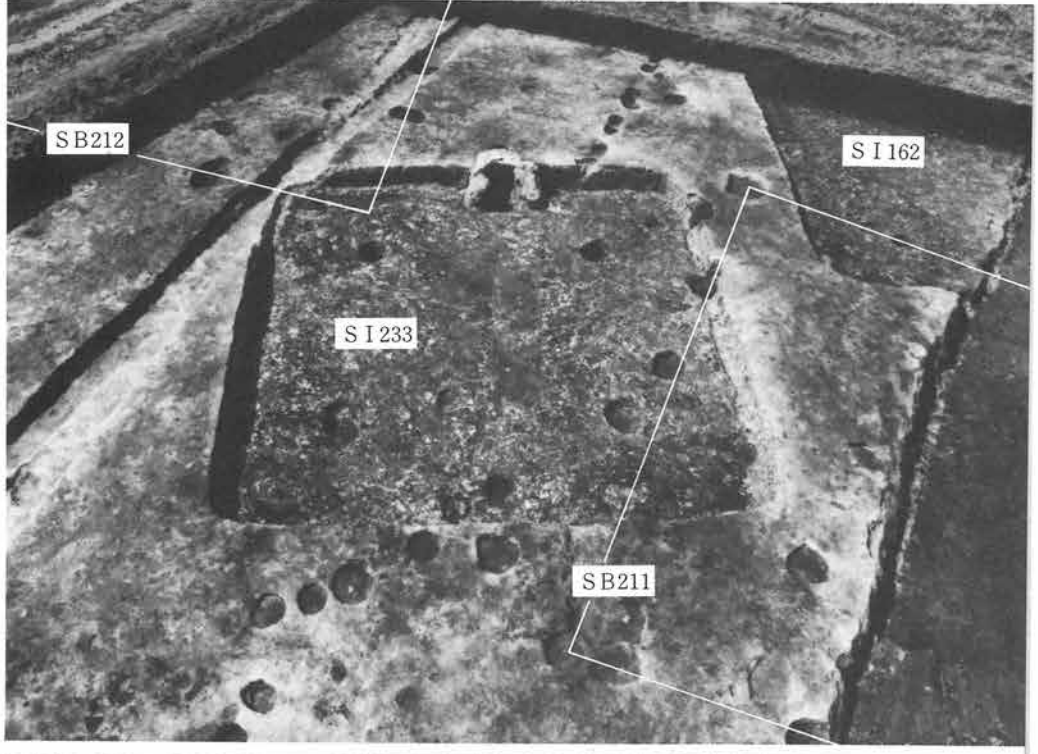
なお、多賀城関連遺跡調査の成果は年次ごとに報告書にまとめている。これまで刊行した報告書には以下のものがある。

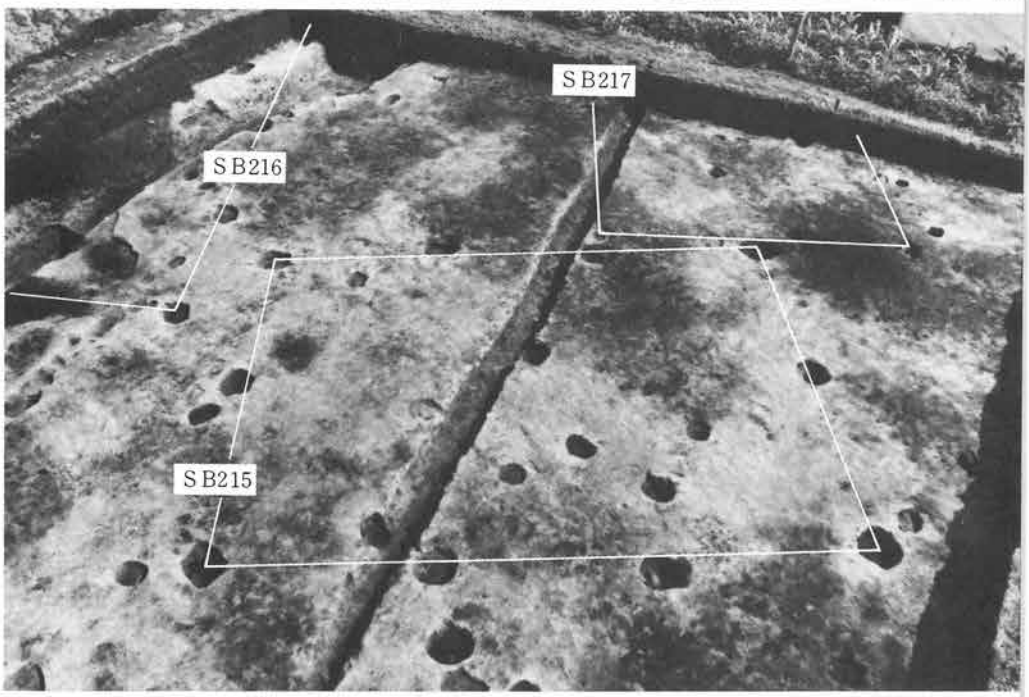
多賀城関連遺跡発掘調査報告書第1冊『桃生城跡Ⅰ－昭和49年度発掘調査報告－』1975
多賀城関連遺跡発掘調査報告書第2冊『桃生城跡Ⅱ－昭和50年度発掘調査報告－』1976
多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3冊『伊治城跡Ⅰ－昭和52年度発掘調査報告－』1978
多賀城関連遺跡発掘調査報告書第4冊『伊治城跡Ⅱ－昭和53年度発掘調査報告－』1979
多賀城関連遺跡発掘調査報告書第5冊『伊治城跡Ⅲ－昭和54年度発掘調査報告－』1980
多賀城関連遺跡発掘調査報告書第6冊『名生館遺跡Ⅰ－玉造柵跡推定地－』1981
多賀城関連遺跡発掘調査報告書第7冊『名生館遺跡Ⅱ－玉造柵跡推定地－』1982
多賀城関連遺跡発掘調査報告書第8冊『名生館遺跡Ⅲ－玉造柵跡推定地－』1983
多賀城関連遺跡発掘調査報告書第9冊『名生館遺跡Ⅳ－玉造柵跡推定地－』1984(本書)



図版 1　上：東地区全景（北から）
下：西地区東半部全景（南から）

図版 2　上：西地区中央部全景（東から）
下：西地区西半部全景（南から）





図版 3

上：東地区

ＳＢ211・212建物跡

ＳＩ162・233住居跡

（南から）

中：東地区

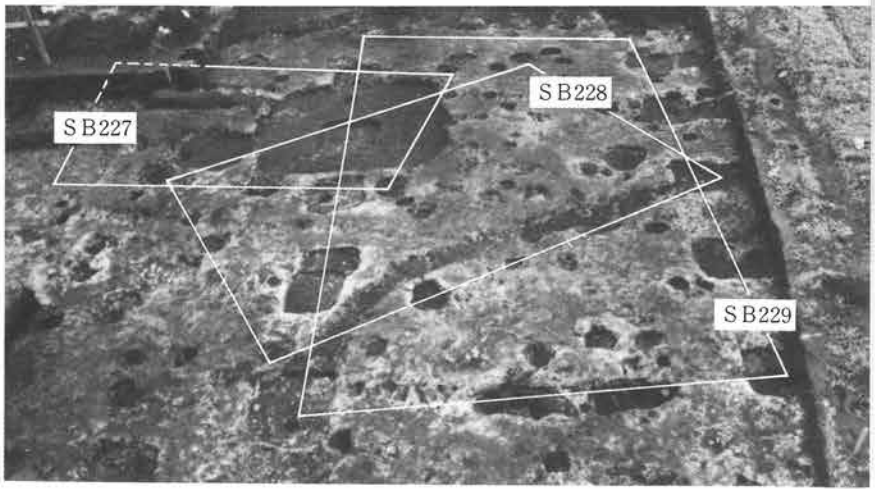
ＳＢ215・216・217建物跡

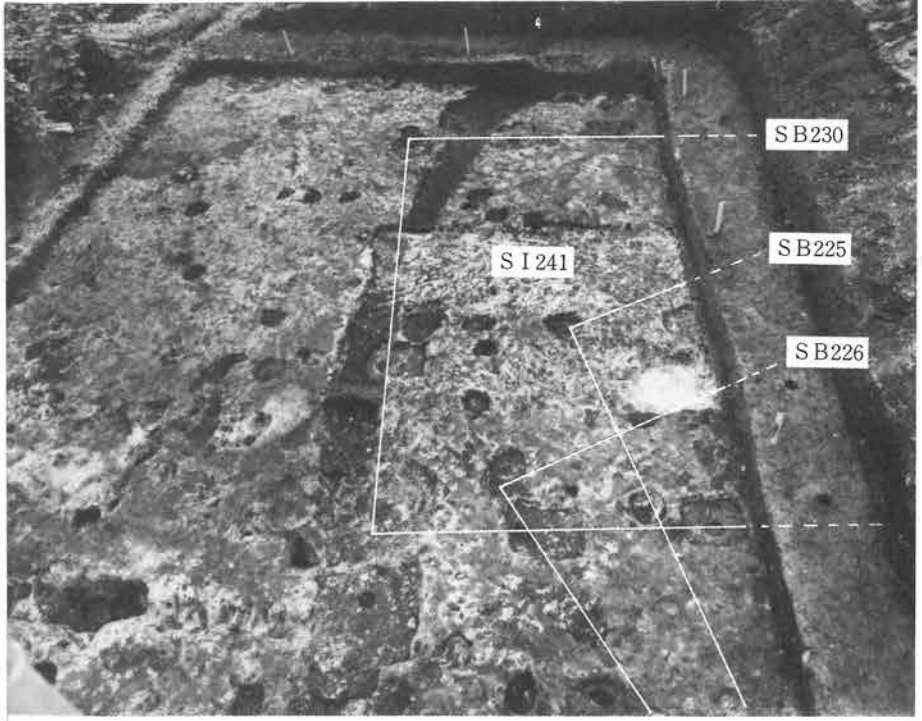
（北から）

下：西地区

ＳＢ227・228・229建物跡

（北から）





図版 4

上：西地区　ＳＢ225・226・230建物跡、ＳＩ240住居跡（南から）

下：東地区　ＳＡ232塀跡（南から）

図版 5

上：西地区

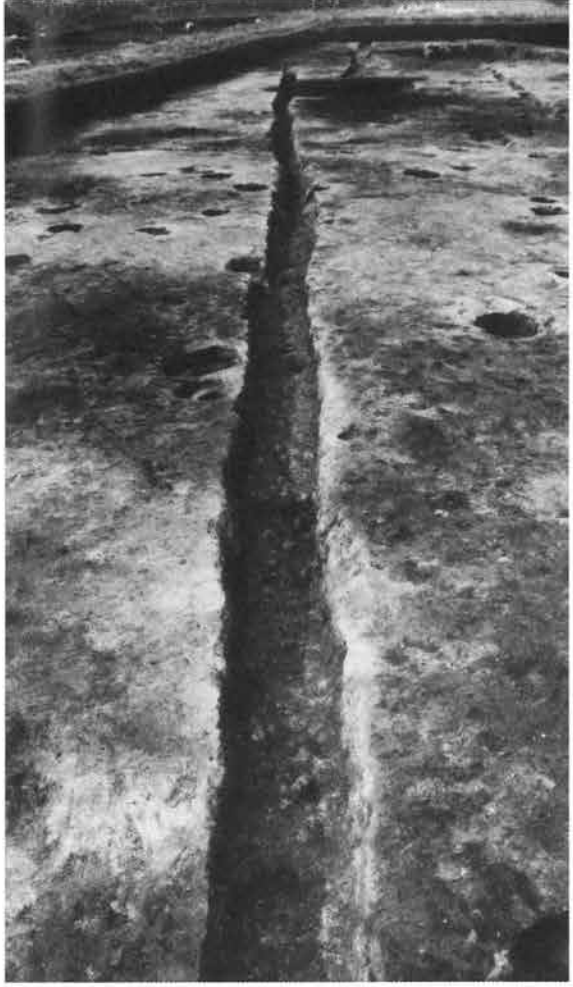
ＳＩ235
住居跡
（南から）

中：西地区

ＳＩ240
住居跡
（西から）

下：西地区

ＳＩ242
住居跡
（南から）

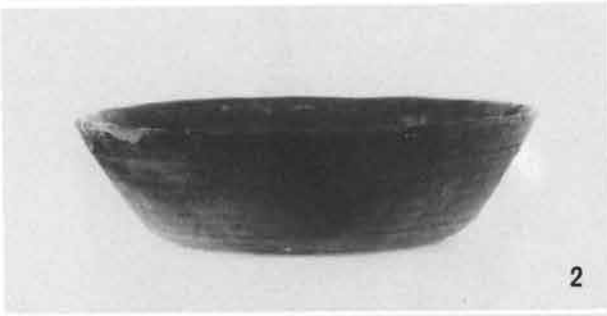


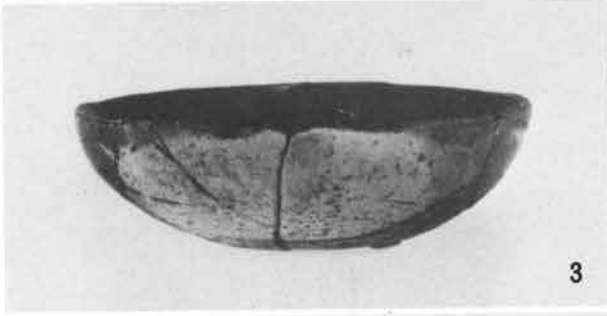
図版 6

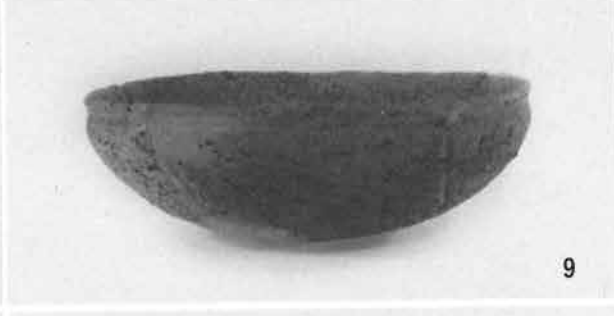
左上：東地区　ＳＤ243溝（南から）

右上：東地区　ＳＤ183溝（南から）

下　：西地区　ＳＸ273窯跡断面図（北から）

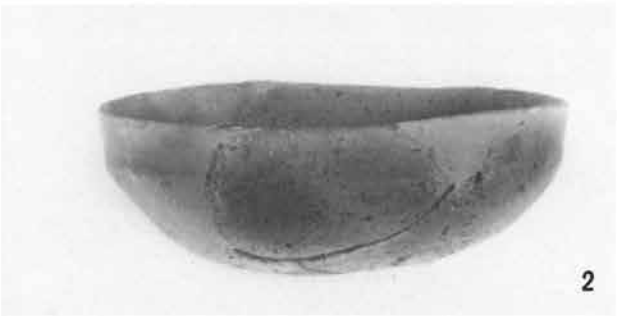






図版 7

1．須恵器杯（第13図１）
2．須恵器杯（第15図１）
3．土師器杯（第14図１）
4．土師器杯（第11図３）
5．土師器杯（第13図３）
6．土師器杯（第14図２）
7．土師器杯（第12図１）
8．土師器杯（第20図７）
9．土師器杯（第17図１）
10．土師器杯（第12図４）



図版 8

1．土師器杯（第12図６）　5．土師器鉢（第12図９）
2．土師器杯（第13図５）　6．土師器鉢（第14図５）
3．土師器杯（第13図７）　7．土師器鉢（第13図９）
4．土師器鉢（第17図３）　8．土師器甕（第13図10）

1

2

図版 9

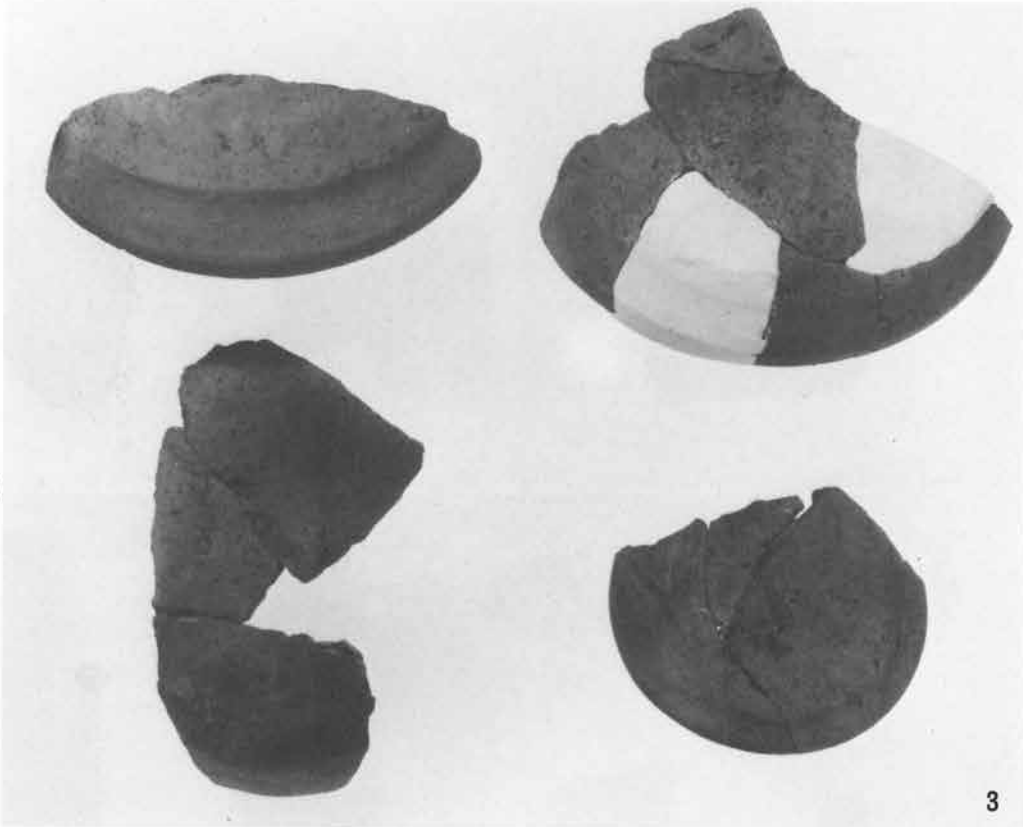
1．須恵器短頸瓶
（第12図10）

2．須恵器長頸瓶
（第17図２）

3．かわらけ
（ＳＸ273
窯跡出土）

4．ヘラ書き
須恵器杯底部
（第17図７）

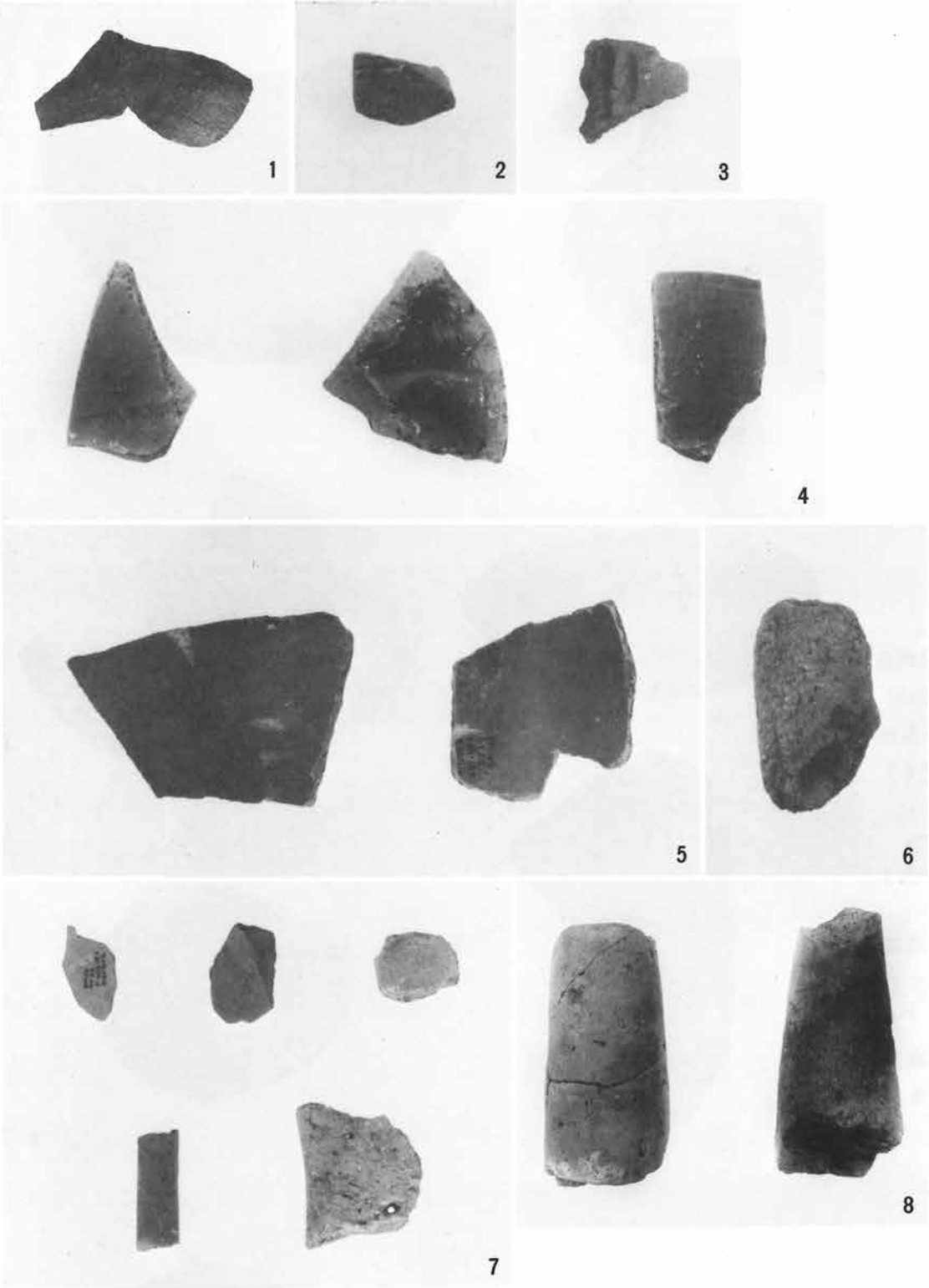
5．ヘラ書き「大」
土師器杯底部
（第15図３）



3

4

5



図版10

1．中世陶器（第1層）　5．転用硯（左：第1層、右：D183埋土）
2．中世陶器（第1層）　6．土　錘（第1層）
3．円面硯（第1層）　7．砥　石（第1層）
4．青　磁（第1層）　8．土製支脚（左：SI233埋土、右：SI238埋土）

多賀城関連遺跡発掘調査報告書第９冊

名生館遺跡Ⅳ

昭和59年３月25日印刷
昭和59年３月31日発行

発行者　宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市浮島字宮前133
ＴＥＬ（02236）８－0101
印刷所　小泉印刷株式会社